

大宜味村史

移民・出稼ぎ編



# 大宜味村史 移民・出稼ぎ編

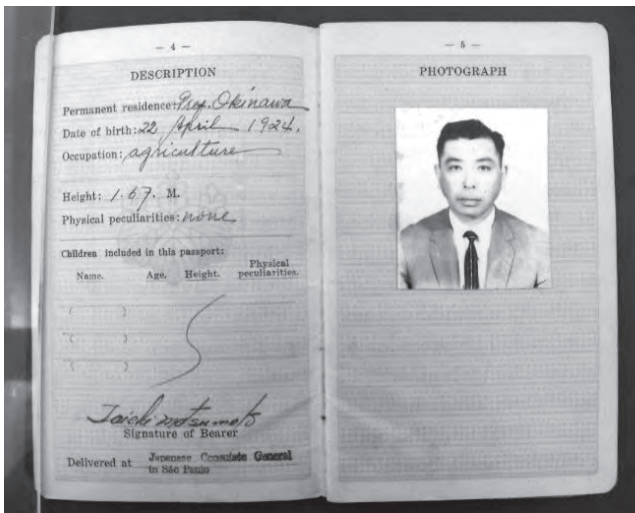
## 目次

グラビア	2	・シンガポール	145
目次	13	・インドネシア(ジャワ・セレベス)	153
発刊のことば	14	三、戦後大宜味村出移民の名簿	159
ごあいさつ	15		
発刊のあいさつ	16	<b>第二章 外地引揚げ</b>	167
凡例	18	・外地からの引揚げ状況概要	167
		・引揚者給金請求書処理表	170
<b>第一章 大宜味村の海外移民状況</b>	23	<b>第三章 県内移住</b>	209
一、戦前大宜味村出移民の全体的考察	23	第一節 八重山開拓移住	209
海外旅券下付表一覧及び集計表	28	第二節 江洲開拓移住	296
二、戦前大宜味村出移民の各国(地域)別考察	67	第三節 県内の郷友会活動	307
移民先別(解説と下付表)		<b>第四章 各字に見る移民・出稼ぎ</b>	317
<b>第一節 北米・アメリカ</b>	67	第一節 各字に見る移民	317
・ハワイ	67	第二節 各字に見る出稼ぎ	365
・アメリカ合衆国本土	73	<b>第五章 移民・出稼ぎ関係資料</b>	395
・カナダ	79	<b>第六章 母村との交流(現在から未来へ)</b>	427
<b>第二節 中南米</b>	83	・世界のウチナーンチュ大会(村の交流会)	427
・メキシコ	83	・南米移住者子弟研修生受入事業	434
・ペルー	93	移民関係年表	436
・ブラジル	109	参考文献	439
・アルゼンチン	119	協力者名簿	442
・ボリビア	125		
<b>第三節 東南アジア</b>	133	奥付	
・フィリピン	133		

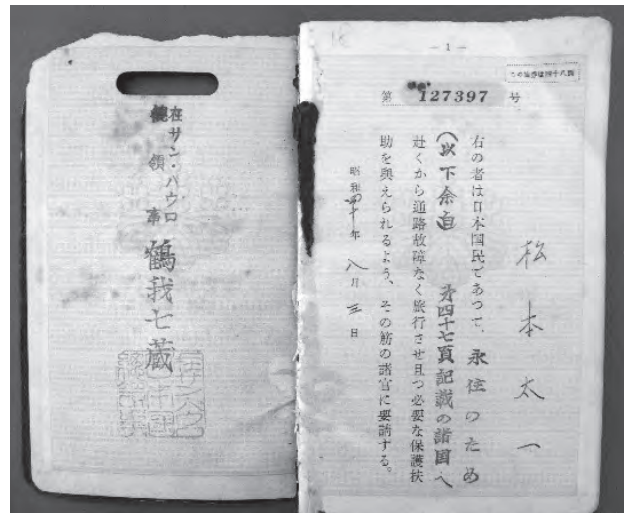


時代を感じさせる証明書類。左からパスポート3点、予防接種証明書、ブラジルの永住許可証（松本太一氏提供）

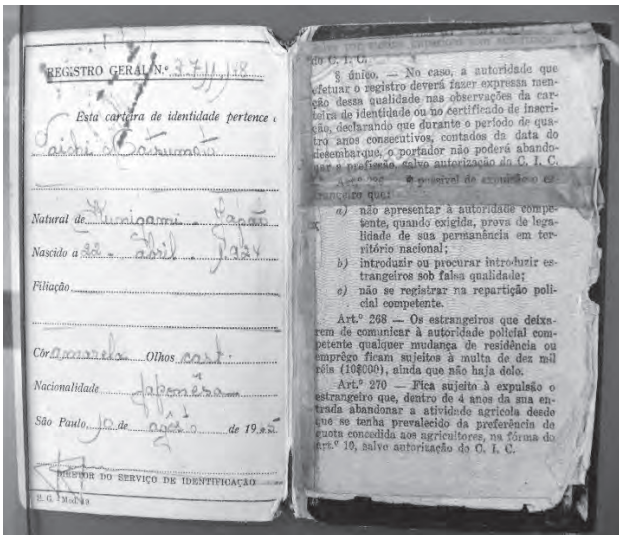
松本太一氏



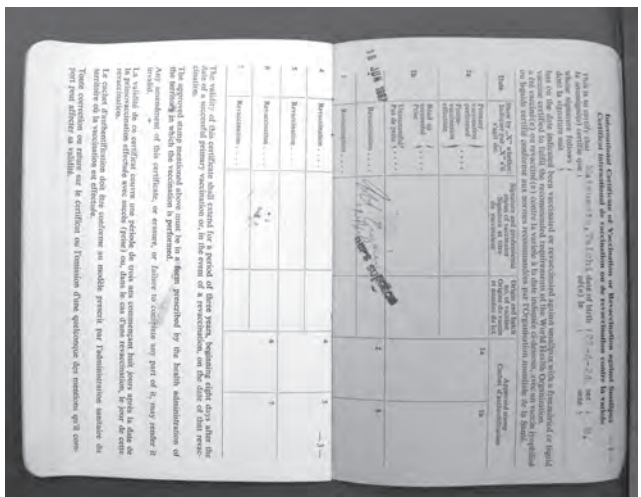
松本太一氏のパスポート



松本太一氏のパスポート



ブラジルの永住証明書



予防接種証明書



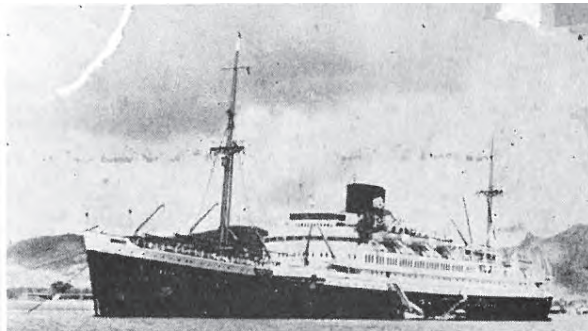


大阪商船の公告

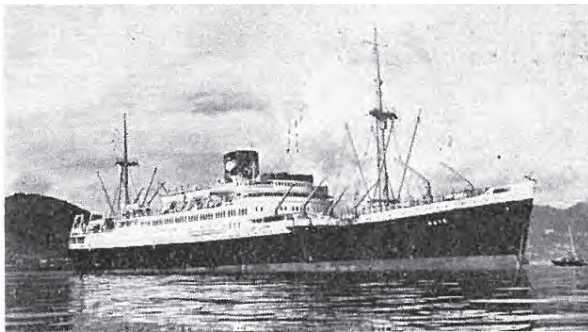
多くの移民の夢を運んだ移民船



チサダネ号



ボイスベイン号

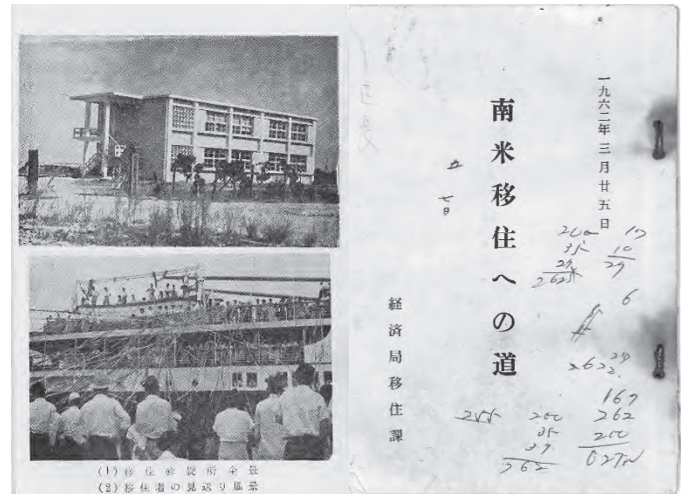


ルイス号



チチャレンカ号

上写真4枚『写真で見る沖縄県人移民の歴史』2014年



琉球政府経済局移住課発行『南米移住への道』



社団法人沖縄海外協会機関誌「雄飛」  
(琉球大学移民研究センター蔵)

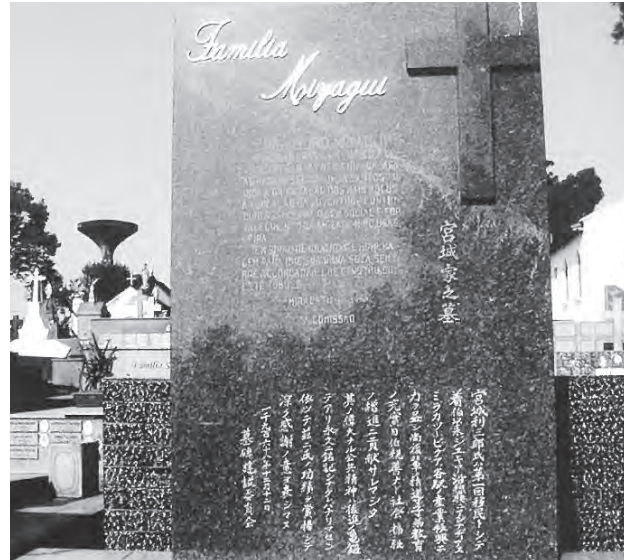


南洋協会南洋群島支部発行の機関誌「南洋群島」(琉球大学移民研究センター蔵)





大宜味村から初のブラジル移民となった宮城利三郎（前列右）とその家族



県人社会の発展に尽力した宮城利三郎の顕彰碑（1967年建立）



那覇埠頭で移民団を見送る  
ボリビア移民を乗せたボイスペン号  
『ボリビアの大地に生きる沖縄移民』2005年



在任喜如嘉人発会式記念『喜如嘉の写真集』1995年  
喜如嘉誌刊行会



笠戸丸が着岸していた頃のサントス港 写真3枚『写真で見るブラジル沖縄県人移民の歴史』2014年



## 発刊のことば

大宜味村長 宮 城 功 光

『大宜味村史 移民・出稼ぎ編』がこのたび発刊の運びとなりました。村史編纂委員をはじめ、編集にあたった各委員、村内外の関係者の皆様のご尽力に厚く感謝申し上げます。

本書は昭和の時代に編さん・発刊された「大宜味村史 通史」では詳細に取上げることのできなかった大宜味村の移民・出稼ぎの背景や歴史を国・地域別に海外旅券下付表をまとめ、送出元の各字の調査、また南洋からの引揚関係資料など新たな史料が収録されています。

また、大宜味村を形成する一七字のうち、九字で字誌が発刊されており、各字や個人で調査・編纂された移民・出稼ぎ関係の記述や名簿も収録しました。

奇しくも昨年は「沖縄県人ペルー移住一一〇周年」「ブラジル沖縄県人会九〇周年」にあたり、両国訪問及び祝典に参加し現地の村人会の皆様より心温まる歓迎をいただきました。その際に本誌発刊にあたり調査としてアンケートを実施したところ、快くご協力いただきました写真のご寄贈もいただきました。改めてお礼申し上げます。また、第六回世界のウチナーンチュ大会が開催され、村出身関係者も多数の参加があり郷里の家族・友人との再会に沸く場面に出会えました。移民母村と海外との絆を再確認できる年となりました。

大海に飛び出した一世移民達は互いに助け合い、知恵と勇気を持って想像を絶する幾多の困難を乗り越え県系人社会の基礎を築かれました。その築かれた礎の上に、後世と続く県系人、村系人の皆様が政治・経済・教育・文化の各分野で活躍し、それぞれの国の発展に大きく寄与されていることは、県・村民の大きな誇りであり、そのご苦労に対し深く敬意を表するとともに、皆様の今後ますますのご健勝とご活躍を祈念申し上げます。

本書が、村民をはじめ多くの人々に読まれ、活用されますことを願い、発刊のことばといたします。

平成二九年 三月



# 「いあらし」

大宜味村史編纂委員会 委員長 米 須 邦 雄

この度、『大宜味村史 移民・出稼ぎ編』を発売する運びとなりました。

本誌は戦前・戦後、大宜味村から海外各地へ雄飛されたイギミンチュ（大宜味人）の苦難と不屈の精神、功績とその足跡を知る手がかりとして、外務省の「海外旅券下付表」をはじめ戦後移民資料、南洋諸島からの引揚関係名簿、各字誌にみられる史料・証言などをまとめたものです。

大宜味村における海外移民の始まりは、「海外旅券下付表」によると一九〇四（明治三七）年のメキシコへの二七人、フィリピンへの五人が最初であり、大戦前の一九四一（昭和一六）年までに述べ八五一人の方の雄飛がみられます。戦後移民についても、琉球政府による米への計画移民や戦前期に移住していた家族による呼寄せなどで二〇七人の方が新天地を求めて海を渡りました。言葉や文化の違う異国の地で多くの苦難を乗り越えて、進取の気風と不屈の開拓精神で移民・移住先でも発展しました。その中で沖繩人・大宜味人としてのアイデンティティと郷里への想いは脈々と次世代へと継承されています。

また、本村から八重山へも多くの開拓移民を送り出しています。本誌発売にあたり、平成二六年度に八重山の西表大富、西表豊原、星野、伊野田、明石、久宇良、大里集落において座談会を行い、村出身者三人の方より開拓当時のお話を伺うことができました。改めて心よりお礼申し上げます。

我々先人の移民・出稼ぎの経験と歴史を知ること、本村の過去・現在を理解し国際社会へのネットワーク形成、母村との絆を強化するものとして活用され、大宜味村の未来を創造する一助となれば幸いです。

結びに、発売にあたり調査執筆にあたった専門部会委員各位をはじめ、資料提供をたまわりました関係各位、村民の皆さん、貴重な体験を語っていただきました移民・出稼ぎ関係者の皆様に深く感謝を申し上げます、発売のごあいさついたします。

平成二九年 三月



## 発刊のあいさつ — 読者へのメッセージ —

移民・出稼ぎ専門部会長 石川友紀

(琉球大学名誉教授)

本年(二〇一七年)『大宜味村史 移民・出稼ぎ編』が発刊されますことは、昨年十月下旬開催の「第六回世界のウチナーンチュ大会」に海外から多くの本村出身の移民とその子孫の方々が郷里を訪れ、親しく村民と交流されたイベントにつづき、意義深い本村の事業であると申せましょう。ご同慶の至りであります。

本書は「新大宜味村史」の中期計画に位置づけられ、第四冊目の村史として発刊されます。村史編纂委員会により、この移民・出稼ぎ編の編集方針が次のように示されました。

進取の気風に富む村民性と言われる大宜味村民にとって、少しでも向上する生活を求めて村外に出て行く、出稼ぎや移民は戦前から特別なものではなかった。どのような人々がどのような地域に出稼ぎ、移民に出て行ったのかを、地域・国・時代・時期ごと等に詳細にまとめる必要がある。

右記の編集方針が本書に十分に生かされたかどうかは読者の判断に俟つことにいたします。これまで他市町村史の移民・出稼ぎ編の場合、その編集作業には最短でも五〜六年は要しております。本書が短期間の編集作業によるもので、十分とはいえませんが、最大限の努力の成果であることをご了承いただければ幸いです。

本書は六章で成り立っていますので、以下各章の内容の概要を述べてみます。第一章は「大宜味村の海外移民状況」のテーマで外務省の「海外旅券下付表」を活用し、その分析・考察を行いました。その前半は総論として、大宜味村から海外への移民の開始が、一九〇四(明治三七)年のメキシコへの二七人とフィリピンへの五人でありますので、その後も継続して送り出された戦前の移民数を年次別・字別にまとめ考察をいたしました。その後半には各論として、本村出身の海外旅券下付表による移民名簿を掲載し、その解説として、移民先国(地域)の概要と初回移民の分析を行いました。戦前本村からの海外移民は、北米・アメリカではハワイ・アメリカ合衆国本土・カナダ、中南

米ではメキシコ・ペルー・ブラジル・アルゼンチン・ボリビア、東南アジアではフィリピン・シンガポール・インドネシアの十一か国（地域）にも及んでいます。

第二章はパスポートを必要としなかった戦前日本の植民地であった南洋群島・台湾・満洲など外地引揚者等の名簿より、本村出身移民の戦時中から戦後にかけての実態を把握することを試みました。

第三章は戦後引揚者などの増加による人口過剰と米軍の土地摂取により、琉球政府の計画による八重山開拓移民と、本村の江洲原への県内移住の歴史とその実態を、座談会形式による証言で拾い出しました。

第四章は市町村単位より一段と掘り下げた既刊および進行中の字（区）誌のなかの移民・出稼ぎ関係資料を丹念に点検し、取捨選択し、移民・出稼ぎ体験者の生活史も含めた身近な世界の実態を取上げました。

第五章は本村を中心に国頭郡・山原も含めて、新聞記事や広報・パンフレット等のなかから移民・移住、出稼ぎ関係資料を収集し、研究の基礎資料として位置づけました。

第六章は一九九七（平成九）年度より開始されました本村の南米移住者子弟研修生受入の制度や名簿、一九九〇（平成二）年沖縄県開催の「第一回世界のウチナンチュ大会」以来第六回大会までの本村出身移民の名簿とその交流の状況を取り上げました。

以上、盛りだくさんの内容となりましたが、反省すべき点多々あります。そのひとつは大宜味村出身移民が在住する移民先国において、現地聞取調査を実施することができなかつたことです。移民の個人史としてのライフヒストリーなど証言が得られなかつたことに関しては、一世移民はもちろん、二世・三世等により今後記録をとっていただき、アーカイブとして残してほしいと願うものです。また、移民先国で発行されております本村人会の周年史や名簿等の出版物より、移民関係の基礎資料が得られると思います。一方、本書の海外旅券下付表の移民名簿より、二世・三世等が一世のルーツをたどり、祖父母の代までをも内包した家族の絆を確かめ合うことも可能となることでしょうか。これらを足がかりにした移民の学術的研究も成り立ちうると思えます。若い研究者の輩出を期待いたします。また、本村においても歴史・伝統をふまえ、移民子弟との交流をとおして、将来の村づくりに邁進できればと思います。

最後に、本書の発刊に際しまして、大宜味村長始め村役場、議会議員の方々、編集委員・専門部会委員・事務局スタッフ、ご協力・ご支援いただきました関係者の皆様に、心より感謝の意を表します。



## 凡例

一、本書は『大宜味村史 移民・出稼ぎ編』とする。

二、本書は、大宜味村史編纂委員会がこれまで調査、収集してきた資料や文献などを、時代（戦前・戦後）、地域（海外・国内）、テーマ（移民・出稼ぎ・引揚げ）ごとに分類・整理して収録したものである。文中に出てくる引用文献などは『』でくくり、発刊年を記した。また、参考・引用文献・資料等の一覧を巻末にまとめた。

三、本書は六つの章で構成している。第一章は、総論として大宜味村における海外移民状況の特徴を概観し、大宜味村全体の海外旅券下付表を収録し、次に渡航国（地域）別に大宜味村からの移民状況の概説及びそれぞれの国（地域）ごとの海外旅券下付表を収録した。第二章は、記録の少ない外地引揚の概要について、引揚者給付金請求書処理表や引揚者名簿、海没者名簿などから推察した。第三章では、八重山や江洲における県内移住の経緯・実態を、主に座談会形式を用いて、移住者たちに語ってもらった。第四章では、各字誌及び各字について著した記念誌などからのものである。字誌や記念誌が発刊されていない字のうち、田港、押川については個人から聞き取りを行い、村内各字の移民・出稼ぎの実態を表出させることに務めた。第五章は関係資料として、移民・移住の案内パンフレットや広報、新聞記事やアンケート調査などで構成している。第六章では、南米移住者子弟研修生受入事業や世界のウチナンチュ大会など、母村との交流について触れている。

四、本書に収録した「移民名簿」、「海外旅券下付表」、「引揚者名簿」は、左記の資料群から大宜味村関係者と思われる者を抜き出し、年代順にそれぞれまとめたものである。なお、原本ではタイトルが「海外旅券下附表」になっているものも、すべて「海外旅券下付表」に統一し、記載内容及び表記については原本に忠実になるよう努力した。

『沖縄県史 資料編六 移民会社取扱移民名簿 自一九二一（大正元）年至一九一八（大正七）年 近代一』 沖縄県教育委員会 一九九八年、『沖縄県史 資料編八 自由移民名簿 自一九〇八（明治四十一）年至一九二〇（大正九）年 近代二』一九九九年、『沖縄県史 資料編十一 移民会社取扱移民名簿 自一九一九（大正八）年至一九二六（昭和元）年 近代三』二〇〇〇年、『沖縄県史 資料編一七 旧南洋群島関係資料 近代5 別冊・サイパン・テニアン収容所捕虜名簿 二〇〇三年、『沖縄県史 資料編一九 自由移民名簿 自一九二一年至一九二五年（近代六）』二〇〇五年、『沖縄県史 研究叢書一三 南洋開拓拾年誌（影印本）』二〇〇二年、『沖縄県史 近代五 自明治三十二年至明治三十九年 移民名簿Ⅰ』一九九二年、『沖縄県史 近代六 自明治四十年至明治四十四年 移民名簿Ⅱ』一九九四年、『南洋群島引揚者名簿（終戦前）・南洋群島海没者名簿』琉球政府内務局 昭和三六年九月、『強制引揚海没者名簿』 沖縄外地引揚者協会 昭和三六年

『外務省記録 海外旅券下付表』昭和二年～昭和一六年 外務省外交史料館、『引揚者給付金請求書処理表』（琉球大学移民研究センター所蔵）

五、本書の記述は次の点に留意した。

・基本的に常用漢字・現代かなづかいを用いた。なお、海外旅券下付表についてはその限りではない。

・引用はできるだけ原文のままとし、文末に（タイトル・発刊年・引用部分（〇ページ〜〇ページ））を付記した。判読不可能な文字については□であらわし、明らかな誤字・脱字については訂正・加筆した。なお、中には差別用語にあたる文言もあるが、当時の社会背景を推し量る手がかりととらえ、原文のままとした。

・縦書きの様式をとっているため、算用数字は漢数字に統一した。海外旅券下付表については、原本で算用数字を使っているところは原本通りとした。年月日は西暦を基本に、元号の方が時代をイメージしやすいと思われるところには元号を用いた。また、「一九〇〇（明治三三）年」「明治三三（一九〇〇）年」のように併記している部分もある。

・新聞記事については、掲載年と社名を記し、前後の流れやまとまりを考慮したうえ要約して使用した。

・人名の敬称は省略した。地名、固有名詞などで漢字が確認できなかったものについてはカタカナで表記した。

・方言については文脈を考慮して、漢字にルビを振る、ひらがな・カタカナを使い分けるなど統一していない。

・座談会については、話し言葉を出るだけそのままの表現で記録することを心がけ、話の流れを大まかな時系列ごとに整理した。意味が通じにくい部分については○で補足・説明を加えた。

六、個人情報保護の観点からは遊離することになるが、海外旅券下付表や引揚者名簿などに記載された各人の住所及び本籍、生年月日などについては、作成されてからのおおよそ五〇〜一〇〇年の経年を鑑みたうえ、大宜味村の移民・出稼ぎの概要を掘り下げ、その中から個人の足跡をたどるといふ本書の目的・性格上、個人を特定する手がかりとして加工を施さずそのまま掲載している。なお、該名簿が作成された時点において存在しない村名（字名）があることに留意されたい。左記にそれら村名の変遷を記す。

○明治三六（一九〇三）年 親田・屋嘉比・見里村が合併して田嘉里村に。根路銘・城・一名代村が合併して謝名城村が誕生する。

○明治四一（一九〇八）年に、大宜味間切は大宜味村（ソン）となり、それまでの村（ムラ）（田嘉里、謝名城、喜如嘉、饒波、大宜味、根路銘、塩屋、

田港、渡野喜屋、津波）は、字（アザ）となる。

○大正一三（一九二四）年に大保が田港から分かれ、字大保ができる。

○昭和三（一九二八）年に上原が根路銘と塩屋の一部から分離、字上原となる。

○昭和四（一九二九）年に宮城が津波から分かれ、字宮城へ。押川が塩屋、根路銘の区域から分離、字押川ができる。

○昭和五（一九三〇）年に屋古が田港から分離、字屋古になる。

○昭和二一（一九四六）年に大兼久が大宜味から独立して字大兼久となる。渡野喜屋は白浜へ改称。

○昭和三七（一九六二）年に行政区として字江洲が誕生。

七、本書の中に登場する国名及び地域の漢字表記については左記を参考にされたい。

アジア 亜細亜

アルジェリア 阿爾及、阿留世里屋

イタリヤ 伊太利、伊太利亜

インドネシア 印度尼西亞

アメリカ 亜米利加、米国

アルゼンチン 亜爾然丁

インド 印度

ウルグアイ 宇柳具、宇柳貝

アラビア 亜刺比亞

イギリス 英吉利、英国

インドシナ 印度支那

エクアドル 厄瓜多



エジプト 埃及  
 オランダ 和蘭、阿蘭陀  
 カリフォルニア 加里福尼  
 コートジボワール 象牙海岸  
 コロンビア 哥倫比亞、古倫比亞  
 サンパウロ 聖市  
 シエラレオネ 獅子山  
 ジャマイカ 牙買加  
 スペイン 西班牙  
 タイ 泰、泰國  
 ドイツ 独逸  
 ハワイ 布哇  
 バンクーバー 晚香坡 晚香波  
 ファイリピン 比律賓  
 ポリビア 暮利比亞、保里備屋、玻里非  
 マウイ 馬哇  
 マレーシア 馬來西亞  
 メキシコ 墨西哥、墨西哥  
 ルソン 呂宋、呂宗  
 ロンドン 倫敦

オーストラリア 濠太刺利、濠州  
 オアフ島 王哇島  
 キューバ 玖馬、玖瑪、久場、古巴  
 コスタリカ 哥斯達利加  
 サースデー島 木曜島  
 サンフランシスコ 桑港  
 シベリア 西比利亞  
 ジャワ 爪哇  
 セイロン 錫蘭  
 チュニジア 突尼斯  
 ドミニカ 土弥尼加  
 パラオ 帛琉  
 バングラデシュ 孟加拉國  
 ブラジル 伯刺西爾、舞樂而留、巴西  
 ポルトガル 葡萄牙  
 マニラ 馬尼刺、麻尼刺  
 ミクロネシア連邦 密克羅尼西亞連邦  
 ヨーロッパ 歐羅巴、欧州  
 ロサンゼルス 羅府  
 ワシントン 華盛頓

オーストリア 奧太利、奧地利  
 カナダ 加奈陀、加奈太  
 グアテマラ 危地馬拉  
 コモロ 科摩羅  
 サモア 薩摩亞  
 シアトル 沙市、沙港  
 シヤム 暹羅  
 シンガポール 新嘉坡、新嘉坡  
 ソロモン諸島 所羅門諸島  
 チリ 智利、智里、知里  
 トリニダード・トバゴ 特多、千里達、特立尼達・多巴哥  
 パラグアイ 巴拉圭、巴羅貝、芭國  
 ファイジー 斐濟、非支  
 ペルー 秘露、秘魯、白路  
 マーシャル諸島 馬歇爾諸島  
 マレー 馬來  
 ミャンマー 緬甸  
 リマ 里馬  
 ロシア 露西亞、露矢亞、魯西亞

## 第一章

# 大宜味村の海外移民状況



第一章 石川友紀

# 第一章 大宜味村の海外移民状況

## 一、戦前大宜味村出移民の全体的考察

国頭郡大宜味村から海外への移民は、いつ、どの国（地域）へ送り出されたのかについて、外務省の「海外旅券下付表」によると、一九〇四（明治三十七）年のメキシコへの二十七人、フィリピンへの五人が最初である。沖縄県から集団的な海外移民の開始は、一八九九（明治三十二年）の二十七人（ハワイ定着は二十六人）であるので、大宜味村の出移民はそれに遅れること五年で、本年（二〇一六年）は一一七年の歴史を有することになる。当時、同村の社会・経済的背景についてみてみよう。

一八七九（明治十二）年に沖縄県が誕生して二十五年後の明治三十年代、交通不便な山原から移民出発港の那覇に出かけるだけでも、並みだたいのことはなかったであろう。それを実施するためには、交通費や渡航費など旅費の捻出、出移民のための諸手続きなど経済的な負担も大きかった。また、出稼ぎ・金もうけとはいえ、県内・日本本土を通り越して遠い海外へ向かったということは、家族の了承も必要で、大きな決断を要したことは間違いない。それに加うるに進取の気性、雄飛の精神もあつたであろう。

**表1**は第二次世界大戦前一九〇四（明治三十七）年から一九四一（昭和十六）年まで三十八年間の大宜味村における年次別渡航先別移民数である。同表最下欄の総合計を渡航先別にみると、一位はペルーの二五六人であり、これは全体（八五一人）の三〇・一％をも占める。移民数の二位はフィリピンの一六二人で全体の一九・〇％、三位はメキシコの一一五人で一三・五％、四位はブラジルの一一三人で一三・三％を占める。この上位のペルー・フィリピン・メキシコ・ブラジルの四か国で全体の七五・九％と大宜味村の戦前移民の大部分を占める。

同村の渡航先別移民数は以下八十人未満となり、五位はシンガポールの七七人で全体の九・〇％、六位はアメリカ合衆国本土の三十八人で四・五％を占める。以下、同村の移民数はハワイの二十六人、アルゼンチンの二十五人、ジャワ（インドネシア）の十一人、カナダの九人、蘭領東印度（インドネシア）の五人、セレベス（同）と暹羅（タイ）の各四人、香港と英領海峽殖民地（マレーシア）の各二人、キューバの一人、ボリビアの一人で、全部で十七か国（地域）にも及んでいた。

以上の結果より全体を考察してみると、データとしての移民統計から、大宜味村の戦前移民の渡航先の特徴を三つあげてみる。第一は南米のペルーへの移民が大正期に大幅に増加し、昭和期も継続して全体の三分の一をも占めている。第二は明治期から大正期にかけて県移民数として多かったハワイへの移民が少ない。第三に昭和期には東南アジアのフィリピンへの移民と、南米ブラジルへの移民が増加し、シンガポールへの移民も多かった。

**表2**は第二次世界大戦前一九〇四（明治三十七）年から一九四一（昭和十六）年まで三十八年間の大宜味村における渡航先別移民数である。本項では「海外旅券下付表」の本籍地にみられる戦前の一〇字を考察の対象とした。

なお、大正期から昭和初期にかけて分字、独立して誕生した大兼久（大宜味から）、上原（根路銘と塩屋の一部から）、屋古（田港から）、押川（塩屋から）、大保（田港から）、宮城（津波から）の六字については、地籍が未分離のままだったのか、その字名は「海外旅券下付表」には表記されておらず、母字に含まれている。渡野喜屋は後に白浜へ改称。江洲は一九六二（昭和三十七）年に開拓部落として誕生した。

**表2**の最下欄の合計を字別にみると、一位は塩屋の一八九人であり、これは全体（八五一人）の二二・二％を占める。移民数の二位は田港の一六七人で全体の一九・六％、三位は田嘉里の一一八人で一三・九％、四位は喜如嘉の一一四人で一三・四％、五位は謝名城の九〇人で一〇・六％を占める。この上位の塩屋・田港・田嘉里・喜如嘉・謝名城の五字で全体の七九・七％と約八割をも占めた。この五字が移民卓越字（集落）と言えよう。

同村の字別移民数は以下五十人未満となり、六位は根路銘の四十九人で全体の五・八％、七位は津波の四十八人で五・六％、八位は大宜味の三〇人で三・五％、九位は饒波の三十二人で三・八％、十位は渡野喜屋（白浜）の十一人で一・三％を占め、全一〇字すべてから海外への移民がみられた。

**表3**は第二次世界大戦後一九五四（昭和二十九）年から一九八三（昭和五十八）年まで三〇年間の大宜味村における年次別渡航先別移民数である。戦後沖縄県における海外移民の開始は一九四八（昭和二十三）年のアルゼンチンへの三十三人、ペルーへの一人合計三十四人である。その後一九五三（昭和二十八）年までの六年間、県の年次別渡航先国別の移民数は記録され、把握できているが、出身市町村別の移民数の資料がみつからない。

**表3**右端計欄の人数を年次別にみると、大宜味村の移民は一九五四（昭和二十九）年に十九人であり、その後一九六二（昭和三十七）年の十二人まで



は、一九五六年の〇人を除き、二桁台で推移している。なかでも移民数の多いのが一九五八（昭和三十三年）の二〇人と翌一九五九（昭和三十四年）年の五十六人であり、その頃がピークである。その期間は琉球政府によるボリビアへの計画移民と、ブラジルへの呼寄せ移民の送り出しの盛んな時期であった。

しかし、一九六三（昭和三十八年）年の七人以後はほぼ一桁台か〇人の年次がつづくが、その衰退の理由は日本本土より遅れて到来した高度経済成長期の影響かと思われる。同村の戦後移民数は一九七八（昭和五十二年）年に十一人と持ちなおすが、一九八三（昭和五十八年）年に一人みられ、合計二〇七人となっている。

つぎに、下欄の合計の人数をみると、大宜味村の戦後移民の渡航先国の一位はブラジルの九十三人であり、これは全体（二〇七人）の四四・九%をも占める。移民数の二位はボリビアの八十二人で全体の三九・六%、三位はアルゼンチンの二十二人で一〇・六%を占める。この上位のブラジル・ボリビア・アルゼンチンの三か国で九五・二%にも達していた。同村から戦後の海外移民はこのほか、パラグアイへ七人、カナダへ三人あり、合計五か国となっていた。

表4は大宜味村における字別渡航先別移民数である。右端の計をみると、移民数の一位は田港の四十一人であり、これは全体（二〇七人）の一九・八%を占める。移民数の二位は田嘉里の三十五人で全体の一六・九%、三位は喜如嘉の三十一人で一五・〇%、四位は塩屋と押川の各二十二人で各一〇・六%を占める。

この上位の田港・田嘉里・喜如嘉・塩屋・押川の五字で全体の七二・九%と大部分を占めた。以下、移民数は二〇人未満となり、饒波の一七人、屋古の十二人、大兼久の八人、謝名城の七人、上原の五人、根路銘の三人、大宜味と津波の各二人であり、大宜味村の十三字から戦後移民がみられた。全体を概観すると、大宜味村における戦後移民は、戦前移民の多かった字から数多く出たと考えよう。

以下、外務省の「海外旅券下付表」による大宜味村から海外へ出た移民の名簿を渡航年の早い順に掲載した。



第15次ボリビア移住団（28家族193名） 社行会か。1962年3月19日（沖縄県公文書館蔵）



ブラジル・アルゼンチン移住団79人出発 出発式 那覇港1968年2月19日（沖縄県公文書館蔵）

表1 大宜味村における年次別渡航先別移民数

(単位：人)

年次	アルゼンチン	ブラジル	ペル	メキシコ	本アメリカ合衆国	カナダ	ハワイ	ジャワ	シンガポール	セレベス	フィリピン	その他	計
1904 (明治37) 年				27							5		32
1905 (明治38) 年							1						1
1906 (明治39) 年							5						5
1907 (明治40) 年				43		4	8						55
1908 (明治41) 年		2	15										17
1909 (明治42) 年													0
1910 (明治43) 年													0
1911 (明治44) 年													0
1912 (明治45) 年													0
1913 (大正 2) 年						1	1						2
1914 (大正 3) 年						1	1						2
1915 (大正 4) 年					1	2	1						4
1916 (大正 5) 年							2						2
1917 (大正 6) 年	1		9		3								13
1918 (大正 7) 年		9	10		5								24
1919 (大正 8) 年		3	28		5	1	2						39
1920 (大正 9) 年			21	3	7		1						32
1921 (大正10) 年		1	14	4	1								20
1922 (大正11) 年			6	3	1		1		1				12
1923 (大正12) 年	1		2	2	2								7
1924 (大正13) 年			19	4	7		3		2				35
1925 (大正14) 年		1	19	13				2	9	1	3		48
1926 (大正15) 年		5	11								4		20
合計	2	21	154	99	32	9	26	2	12	1	12		370

年次	アルゼンチン	ブラジル	ペル	メキシコ	本アメリカ合衆国	カナダ	ハワイ	ジャワ	シンガポール	セレベス	フィリピン	ポリビア	香港	キューバ	暹(タイ)羅	植英領民海峽地 / 蘭領東印度	計
1927 (昭和 2) 年	4	7	21	3	3				2		16						56
1928 (昭和 3) 年		6	14	5				1	9		7			1			43
1929 (昭和 4) 年	1	9	8	3				1	5		13					4	44
1930 (昭和 5) 年	3	2	9	1	1			7	8	1	10					1	43
1931 (昭和 6) 年	5	8							8								21
1932 (昭和 7) 年		5	4	2	1										4	1	17
1933 (昭和 8) 年	1	19	4						1		2						27
1934 (昭和 9) 年	1	15	5	1					6		3		1			1	33
1935 (昭和10) 年	2		13						7		10						32
1936 (昭和11) 年	2		12						8		23	1					46
1937 (昭和12) 年	3	1	3	1					11	2	18						39
1938 (昭和13) 年	1	5	4								27						37
1939 (昭和14) 年		10	4		1						8		1				24
1940 (昭和15) 年		4	1								8						13
1941 (昭和16) 年		1									5						6
合計	23	92	102	16	6	0	0	9	65	3	150	1	2	1	4	2	481
総合計	25	113	256	115	38	9	26	11	77	4	162	1	2	1	4	2	851

資料の出所：外務省記録「海外旅券下付表」琉大移民研究センター所蔵による。なお、その一部の集計（昭和期のブラジル渡航者 90 人）については、同所蔵海外興業株式会社「海外渡航者名簿 伯刺西爾行」第 1 巻～第 10 巻による。

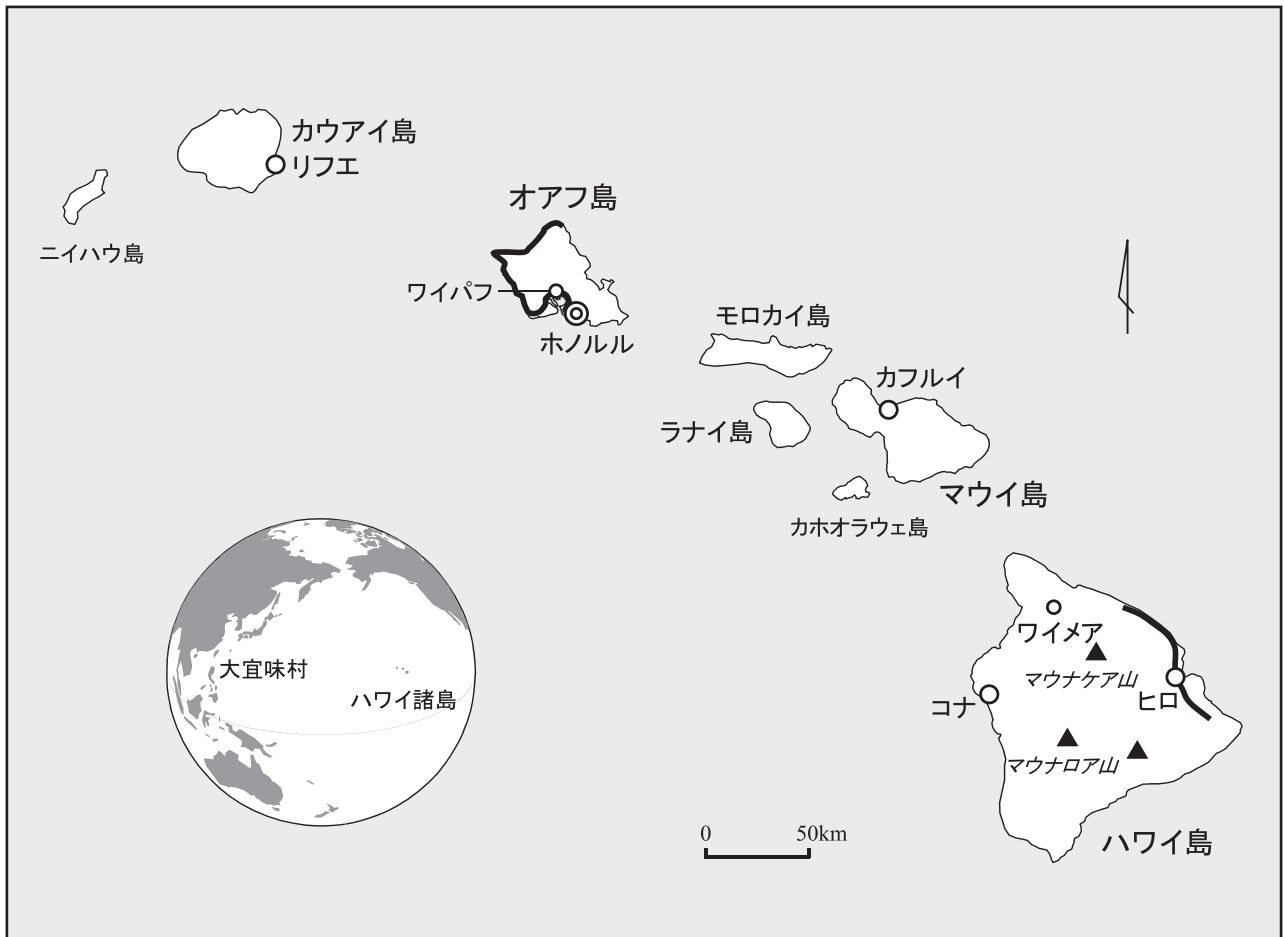


海外旅券下付表（大宜味村出身者）

旅券番号	氏名	族籍	身分	本籍地	生年月日／年齢	移民取扱人・保証人	渡航地名	渡航目的	下付年月日	渡航年月日
九八〇三二	濱元 原光	平民農	戸主源徳三男	根路銘村二二四番地	明治十年十一月二十九日	帝国殖民合資会社	馬尼拉	土木	明治三十七年五月十四日	明治三十七年六月二十三日
九八〇二七	山城清三郎	平民農	戸主	謝名城村九〇六番地	明治六年八月十日	帝国殖民合資会社	馬尼拉	土木	明治三十七年五月二十一日	明治三十七年六月二十三日
九八〇三〇	金城 仁太	平民農	戸主仁吉二男	大宜味村五六八番地	明治十六年七月八日	帝国殖民合資会社	馬尼拉	土木	明治三十七年五月二十四日	明治三十七年六月二十三日
九八〇三四	金城 健泰	平民農	戸主	根路銘村一九六番地	明治七年八月六日	帝国殖民合資会社	馬尼拉	土木	明治三十七年五月二十四日	明治三十七年六月二十三日
九八〇一八	宮城 幸八 (孝)	平民農	戸主孝之二男	塩屋村七三七番地	明治八年十一月二十一日	帝国殖民合資会社	馬尼拉	土木	明治三十七年五月二十四日	明治三十七年六月二十三日
九八〇六四	内間 由忠	平民(土族) 農	戸主由順養子	塩屋村六三九番地	二十九年九月月	東洋移民合資会社	メキシコ	農鉱業	明治三十七年六月二十日	明治三十七年七月六日
九八〇六三	糸村牛太郎	平民農	戸主	塩屋村六八四番地	二十九年三月月	東洋移民合資会社	メキシコ	農鉱業	明治三十七年六月二十日	明治三十七年七月六日
九八〇六二	宮城勝次郎	平民農	戸主□二男	塩屋村七三九番地	二十三年七月月	東洋移民合資会社	メキシコ	農鉱業	明治三十七年六月二十日	明治三十七年七月六日
九八〇六一	宮城鍋三郎	平民農	戸主常吉婿養子	塩屋村五八三番地	二十五年六月月	東洋移民合資会社	メキシコ	農鉱業	明治三十七年六月二十日	明治三十七年七月六日
九八〇六八	島袋松太郎	平民農	戸主	田港村六六九番地	三十二年七月月	東洋移民合資会社	メキシコ	農鉱業	明治三十七年六月二十日	明治三十七年七月六日
九八〇六七	山城 太郎	平民農	戸主刈政弟	田港村六八五番地	二十七年	東洋移民合資会社	メキシコ	農鉱業	明治三十七年六月二十日	明治三十七年七月六日
九八〇六六	吉元重次郎	平民農	戸主	田港村六五四番地	二十八年六月月	東洋移民合資会社	メキシコ	農鉱業	明治三十七年六月二十日	明治三十七年七月六日
九八〇七二	太田 朝良 (大)	平民(土族) 農	戸主朝矩弟	田港村六五五番地	三十三年一ヶ月	東洋移民合資会社	メキシコ	農鉱業	明治三十七年六月二十日	明治三十七年七月六日
九八〇七〇	前田 福蔵	平民農	戸主福助二男	田港村六四七番地	二十一年十月月	東洋移民合資会社	メキシコ	農鉱業	明治三十七年六月二十日	明治三十七年七月六日
九八〇七一	山城 亀一	平民農	戸主嘉□弟	田港村五六九番地 (六五九)	二十三年五月月	東洋移民合資会社	メキシコ	農鉱業	明治三十七年六月二十日	明治三十七年七月六日
九八〇六九	山城 守盛	平民農	戸主守正長男	田港村七二四番地 (一二四)	二十四年一ヶ月	東洋移民合資会社	メキシコ	農鉱業	明治三十七年六月二十日	明治三十七年七月六日
九八〇七五	野里耕三郎	平民農	戸主耕太郎長男	謝名城村五二番地	二十年十月月	東洋移民合資会社	メキシコ	農鉱業	明治三十七年六月二十日	明治三十七年七月六日
九八〇七四	山城 岩吉	平民農	戸主	謝名城村八九一番地	三十年二ヶ月	東洋移民合資会社	メキシコ	農鉱業	明治三十七年六月二十日	明治三十七年七月六日
九八〇七三	大城正三郎	平民農	戸主正蔵二男	謝名城村四番地	二十一年二ヶ月	東洋移民合資会社	メキシコ	農鉱業	明治三十七年六月二十日	明治三十七年七月六日
九八〇七九	大城 蔵一	平民農	戸主蔵治長男	謝名城村八二番地	二十九年二ヶ月	東洋移民合資会社	メキシコ	農鉱業	明治三十七年六月二十日	明治三十七年七月六日
九八〇七八	平良 平三	平民農	戸主平吾弟	謝名城村八八七番地	二十四年二ヶ月	東洋移民合資会社	メキシコ	農鉱業	明治三十七年六月二十日	明治三十七年七月六日
九八〇七七	大嶺嘉三郎	平民農	戸主	田嘉里村一二四二番地	二十六年二ヶ月	東洋移民合資会社	メキシコ	農鉱業	明治三十七年六月二十日	明治三十七年七月六日
九八〇七六	山城源次郎	平民農	戸主源吉三男	田嘉里村一四二五番地	二十七年一ヶ月	東洋移民合資会社	メキシコ	農鉱業	明治三十七年六月二十日	明治三十七年七月六日

二、戦前大宜味村出移民の各国（地域）別考察

# 大宜味村の ハワイ移民







## 一、北米・アメリカ

### (一) ハワイ

かつてハワイ王国として一国を維持していたハワイは、現在はアメリカ合衆国の一州である。ハワイ州は太平洋の中央よりやや東よりの熱帯地域に位置し、西北から東南へ二、五六〇kmにわたって斜状に点在する約一三〇の島々から成り立っている。ハワイ州の面積は一六、七五九・三km<sup>2</sup>で、日本の四国の面積（一八、八〇一km<sup>2</sup>）よりやや狭い。一般にハワイ八島と称される島々の面積を大きさの順にみると、ハワイ島（一〇、四三三・一km<sup>2</sup>）、マウイ島（二、八三三・七km<sup>2</sup>）、オアフ島（一、五四六・五km<sup>2</sup>）、カウアイ島（一、四三〇・五km<sup>2</sup>）、モロカイ島（六七三・五km<sup>2</sup>）、ラナイ島（三六四・〇km<sup>2</sup>）、ニイハウ島（二七九・九km<sup>2</sup>）、カホオラヴェ島（一一五・五km<sup>2</sup>）であり、州都はオアフ島のホノルル市である。

ハワイの気候は一年を通じて温和であり、日中戸外ではかなりの暑さを感じず、年中北東から吹く貿易風の冷風に恵まれ、室内または木陰におれば快適である。気温は一年を通じて最高が三十度C、最低が十八度Cの間を下し、水温はつねに二十一度Cである。雨季は十一月から翌年の四月までであるが、年中降りつづくことはない。暴風雨もまれにはあるが、ハリケーンの襲来がたまにある。

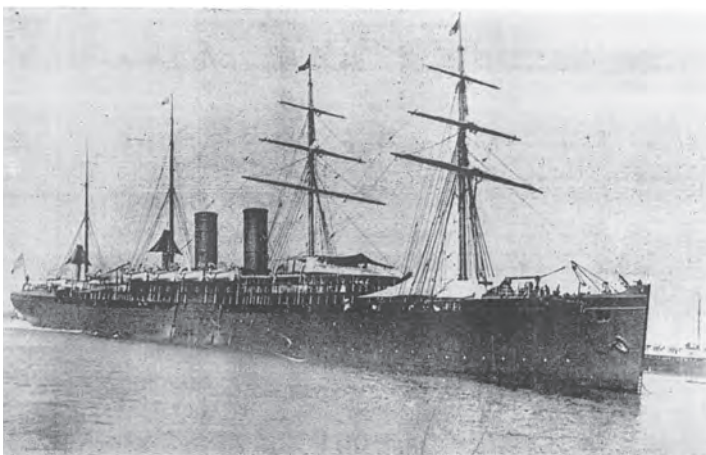
ハワイの歴史は一七七八年英国の航海探検家キャプテン・ジェイムス・クックによるハワイ諸島の発見により世界に知られるようになった。当時ハワイ諸島にはアジア人種を先祖とするポリネシア人であるハワイアンが二十万人から三十万人も住んでいた。

ハワイはこの先住民であるハワイアンにより一七九五年以降カメハメハ一世により統一され、ハワイ王国が八代にわたりつづいた。しかし、王国は一八九三年リリウオカラニ女王の時代に崩壊し、一八九三年から一九〇〇年までアメリカ合衆国の白人勢力により臨時政府の大統領サレフオード・ピー・ドールにより統治された。一八九九年にアメリカ合衆国に併合され、翌一九〇〇年に米国の準州として発展してきた。以後六十年間準州の時代がつづき、ハワイは一九五九年にアメリカ合衆国の第五十番目の州となり今日に至っている。

日本からハワイへの移民は一八六八（明治元）年の一五三人が最初で「元年者」と呼ばれた。本格的なハワイへの集団移民の開始は一八八五（明治十八）年の九五三人の官約移民（契約移民）からである。

沖縄県からハワイへの最初の移民は一八九九（明治三十二）年十二月五日に那覇港を出航し、鹿児島・神戸を経て十二月三十日に横浜を出港したチャイナ号（外国船・五、九〇〇ト）で、翌一九〇〇（明治三十三年）年一月八日にホノルル港に到着した二十七人（男性のみ）であった。同年一月十六日に上陸を許可され、オアフ島のエワ耕地のサトウキビ栽培の契約移民として働いた二十六人がハワイへの初回移民である。

表1の大宜味村における年次別渡航先別移民数をみると、同村からハワイへの移民は一九〇五（明治三十八）年の一人が最初である。外務省の「海外旅券下付表」によると、同村初のハワイ移民福地徳一は身分（続柄）が戸主で、族籍が平民で農民、本籍地が田港村一〇四番地、生年月日が明治十六年八月五日生（渡航時二十一歳）、移民取扱人が大陸殖民合資会社（移民会社）、渡航先がハワイ（布哇）、渡航目的が農業であり、旅券が一九〇五年十二月二十七日に下付されている。



ハワイ州立古文書記録局保存、沖縄第一回移民が乗船来布した汽船チャイナ号。1900年の撮影、『五大州』No60（1969年）比嘉太郎氏提供。

ハワイ

▲明治三十八年（一九〇五）

旅券番号	氏名	族籍	身分	本籍地	生年月日（年齢）	保証人・移民取扱人	渡航地名	渡航目的	下付月日 （渡航月日）
一四三七〇	福地 徳一	平民農	戸主	田港村一〇四番地	明治十六年八月五日	大陸殖民合資会社	布哇国	農業	（明治三十八年二月六日） （明治三十七年十二月二十七日） （三月二十二日渡航）

▲明治三十九年（一九〇六）

旅券番号	氏名	族籍	身分	本籍地	生年月日（年齢）	保証人・移民取扱人	渡航地名	渡航目的	下付月日 （渡航月日）
六六〇八	宮城 新昌	平民農	戸主新祥長男	根路銘村一五五番地	明治十七年五月十四日	海外渡航株式会社	布哇	農業	一月二十一日 （二月二十日）
一三四一五	玉城 伊保	平民農	戸主伊吉五男	田嘉里村九四七番地	明治十七年三月十七日	海外渡航株式会社	布哇	農業	三月十七日 （四月十四日）
四一三四一	金城 正孝 （幸）	平民農	戸主政全長男	喜如嘉村四九七番地	二十二年三月月	晩成移民合資会社	布哇	農業	九月二十七日 （十二月一日）
五九九六四	安次富長照	平民農	戸主長張長男	塩屋村五九五番地	二十四年	日本殖民合資会社	布哇	農業労働	十二月二十六日 （明治四十年一月五日）
五九九六五	金城林五郎	平民農	戸主林次郎五男	塩屋村七二八番地	二十一年	日本殖民合資会社	布哇	農業労働	十二月二十六日 （明治四十年一月五日）

▲明治四十年（一九〇七）

旅券番号	氏名	族籍	身分	本籍地	生年月日（年齢）	保証人・移民取扱人	渡航地名	渡航目的	下付月日 （渡航月日）
六六八七七	仲井間宗永	平民（土族） 農	戸主宗恵三男	饒波村一五六番地	三十年三月月	晩成移民合資会社	布哇	農業	一月十二日 （二月二十三日）
六七二二二	金城 平喜	平民農	戸主平吉長男	饒波村二一〇番地	二十七年	日本殖民合資会社	布哇	農業労働	三月十三日
七七六一六	前田 景明	平民農	戸主景〇二男	喜如嘉村五五五番地	明治二十年八月	晩成移民合資会社	布哇	農業	三月十二日 （三月二十四日）
七七六〇八	平良 孝心	平民農	戸主孝徳長男	津波村八五一番地	明治二十年六月	晩成移民合資会社	布哇	農業	三月十二日 （三月三日）
八五六六一	宮城 信實	平民農	戸主	根路銘村二三九番地	明治十年五月	晩成移民合資会社	布哇	農業	六月三日 （六月十七日）
八五六六〇	稲福善太郎	平民農	戸主嵩保長男	根路銘村一〇七〇番地	明治十五年八月	晩成移民合資会社	布哇	農業	六月三日 （六月十七日）
八五九六九	新里 清吉	平民農	戸主清太四男	根路銘村一〇八番地	明治二十年十二月	晩成移民合資会社	布哇	農業	七月二十七日 （八月二十四日）
一一二四八一	宮城 宗一	平民農	戸主宗作長男	塩屋村六三五番地	明治二十四年四月二十八日	防長移民合資会社	北米合衆国領 布哇	農業	十二月三日 （十二月十九日）

▲大正二年（一九一三）

旅券番号	氏名	族籍	身分	本籍地	生年月日（年齢）	保証人・移民取扱人	渡航地名	渡航目的	下付月日 （渡航月日）
四九一六九	平良 カマ		非戸主孝心妻	字津波八五一番地	十七年五月月		布哇	夫ノ呼寄	七月二十六日



▲大正三年（一九一四）									
旅券番号 五六〇八	氏名 前田 カメ	族籍	身分 非戸主宗八妻	本籍地 字喜如嘉五五五番地	生年月日（年齢） 十八年三ヶ月	保証人・移民取扱人	渡航地名 布哇	渡航目的 夫ノ呼寄	下付月日 （渡航月日） 三月三日

▲大正四年（一九一五）									
旅券番号 七〇六一〇	氏名 仲井間ウシ	族籍 平民	身分 非戸主宗永妻	本籍地 字饒波〔番地欠〕	生年月日（年齢） 二十年十一ヶ月	保証人・移民取扱人	渡航地名 布哇	渡航目的 夫ノ呼寄	下付月日 （渡航月日） 四月一日

▲大正五年（一九一六）									
旅券番号 一〇〇四〇六	氏名 金城 正全	族籍	身分 戸主	本籍地 字喜如嘉四九七番地	生年月日（年齢） 四十九年八ヶ月	保証人・移民取扱人	渡航地名 米領布哇	渡航目的 子ノ呼寄	下付月日 （渡航月日） 十二月二十日
一〇〇七三九	金城 ント		戸主正全長男正幸妻	字喜〔如嘉〕四九七番地	二十四年十ヶ月		米領布哇	夫ノ呼寄	十二月二十日

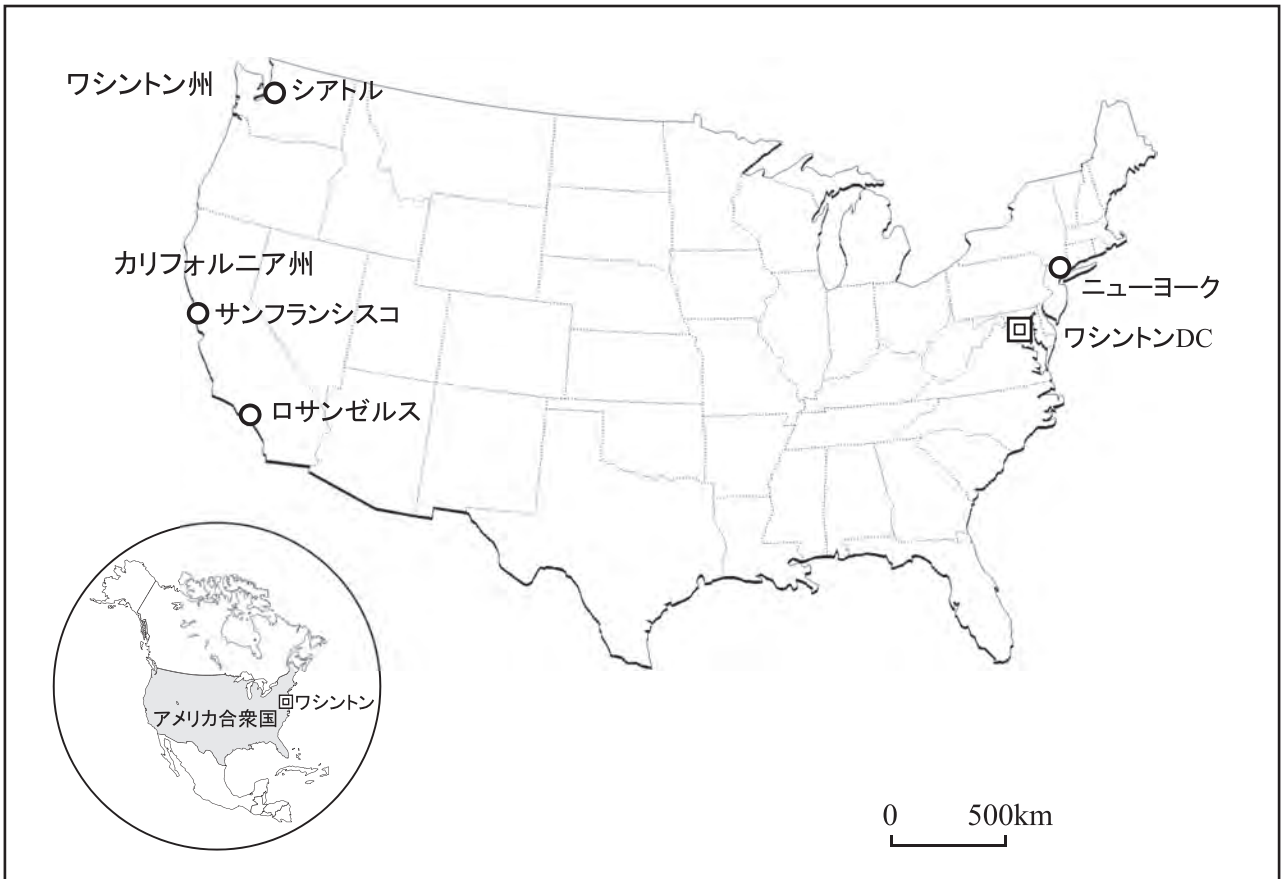
▲大正八年（一九一九）									
旅券番号 一六〇八三四	氏名 金城 正幸	族籍	身分 戸主正全長男	本籍地 字喜如嘉四九七番地	生年月日（年齢） 三十年九ヶ月	保証人・移民取扱人	渡航地名 布哇	渡航目的 再ヒ	下付月日 （渡航月日） 十二月五日
一六〇八三五	金城 カメ		戸主正全長男正幸妻	字喜如嘉四九七番地	十九年六ヶ月		布哇	夫ト同行	十二月二十四日

▲大正九年（一九二〇）									
旅券番号 一六七〇七七	氏名 金城 カメ	族籍	身分 正幸妻	本籍地 字喜如嘉四九七番地	生年月日（年齢） 十九年十ヶ月	保証人・移民取扱人	渡航地名 布哇	渡航目的 夫ノ呼寄	下付月日 （渡航月日） 五月九日

▲大正十一年（一九二二）									
旅券番号 二〇二六六五	氏名 前田 景明	族籍	身分 戸主景良弟	本籍地 字喜如嘉五五五番地	生年月日（年齢） 三十五年	保証人・移民取扱人	渡航地名 布哇	渡航目的 再	下付月日 （渡航月日） 八月二十五日

▲大正十三年（一九二四）									
旅券番号 二二四二三四	氏名 前田 カメ	族籍	身分 戸主景良弟景明妻	本籍地 字喜如嘉五五五番地	生年月日（年齢） 二十八年六ヶ月	保証人・移民取扱人	渡航地名 布哇	渡航目的 再ヒ	下付月日 （渡航月日） 四月二十八日
二二四二三五	前田 キタ		長女	字喜如嘉五五五番地	八年八ヶ月		布哇	再ヒ	四月二十八日
二二四二二六	前田 春子		二女	字喜如嘉五五五番地	七年一ヶ月		布哇	再ヒ	四月二十八日

大宜味村の  
アメリカ合衆国移民



# 大宜味村の カナダ移民

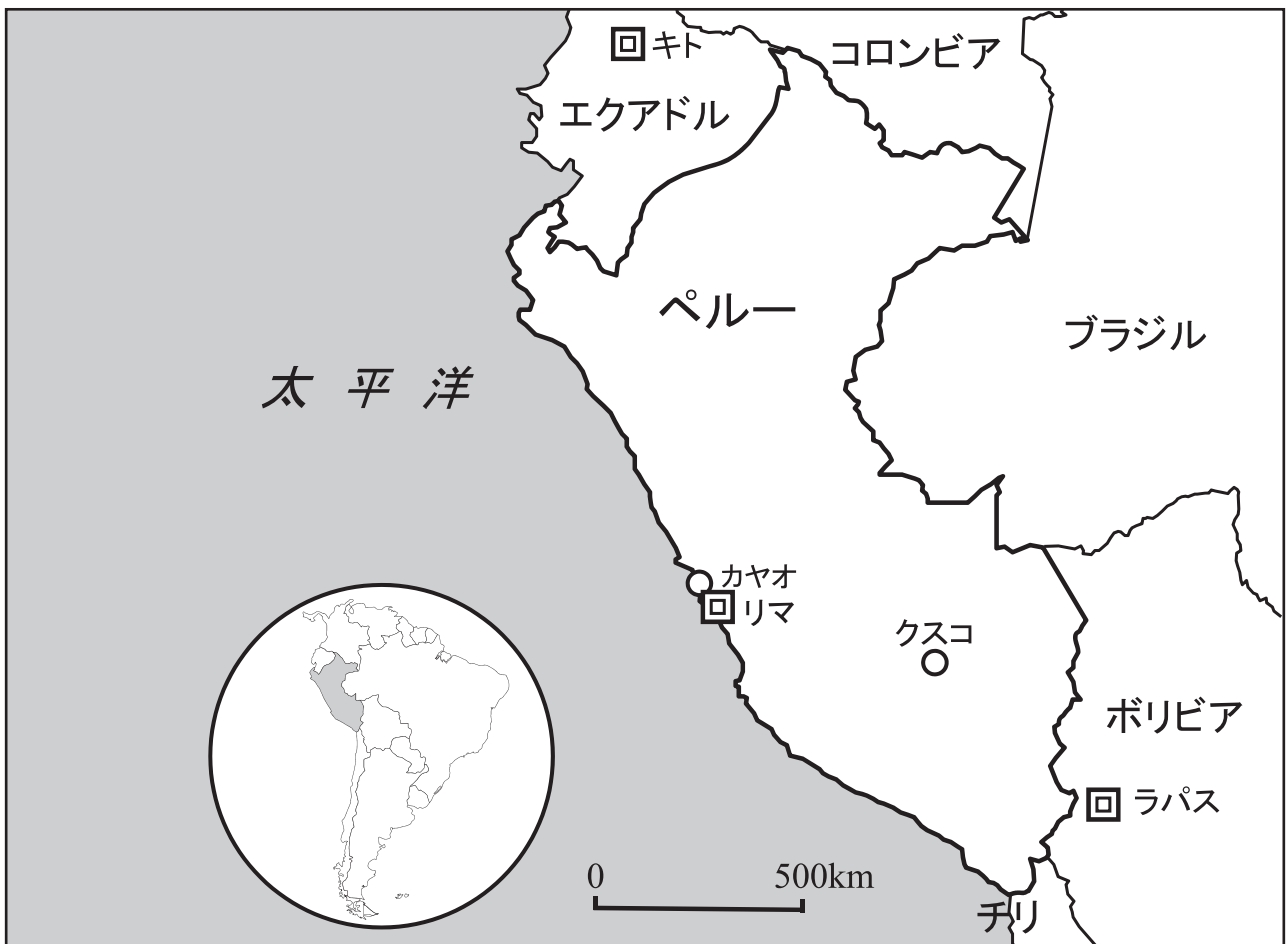




大宜味村の  
メキシコ移民



大宜味村の  
ペルー移民



# 大宜味村の ブラジル移民





大宜味村の  
アルゼンチン移民



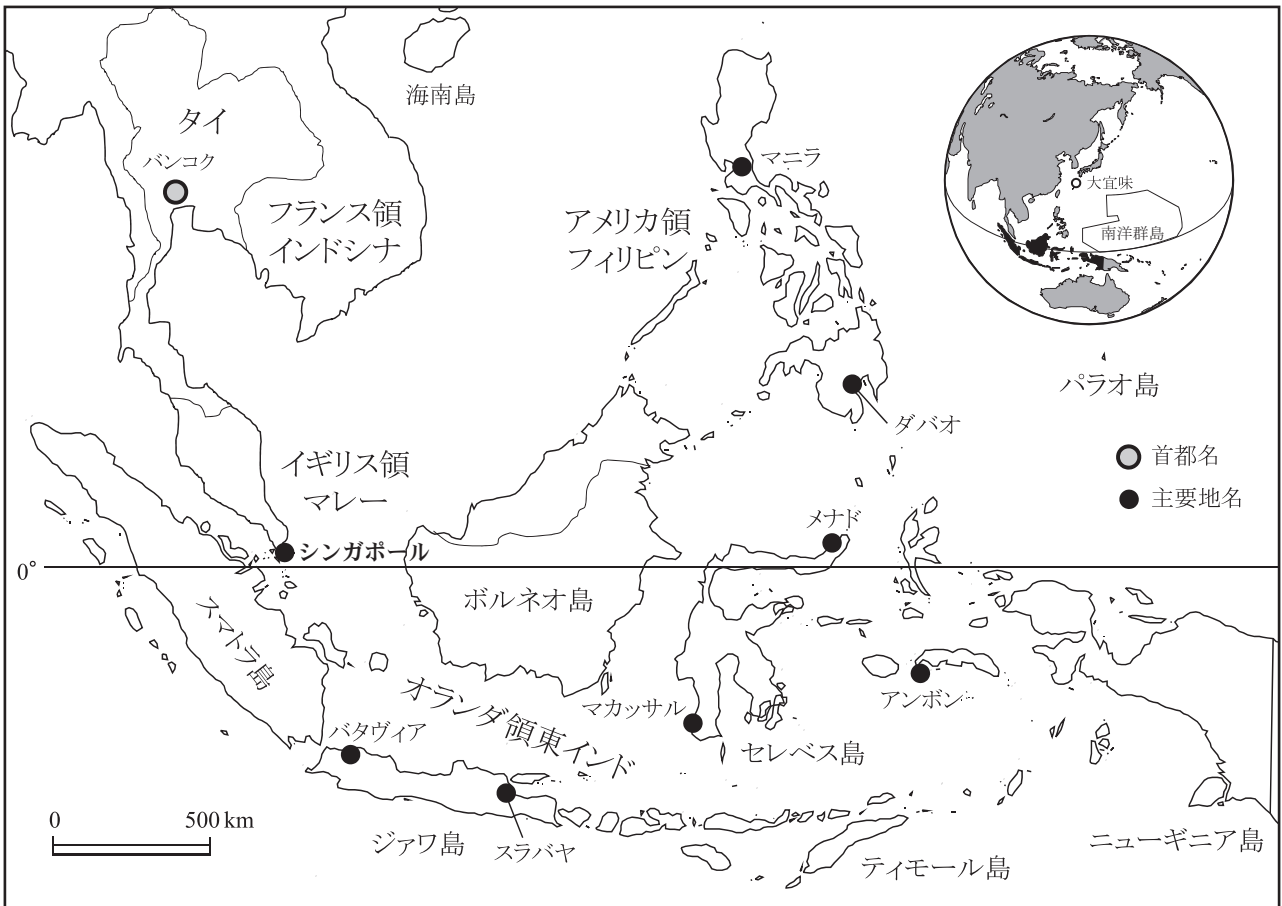
# 大宜味村の ボリビア移民



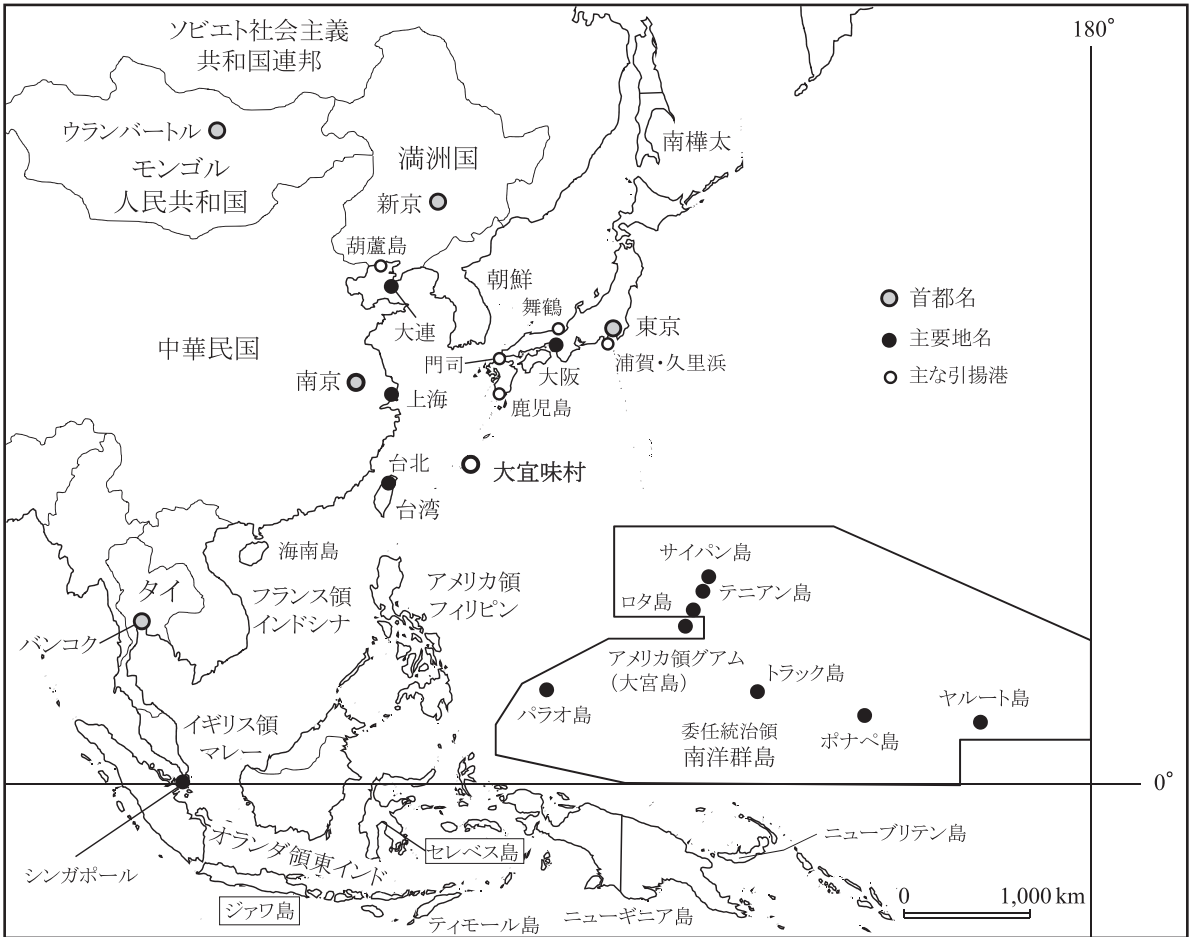




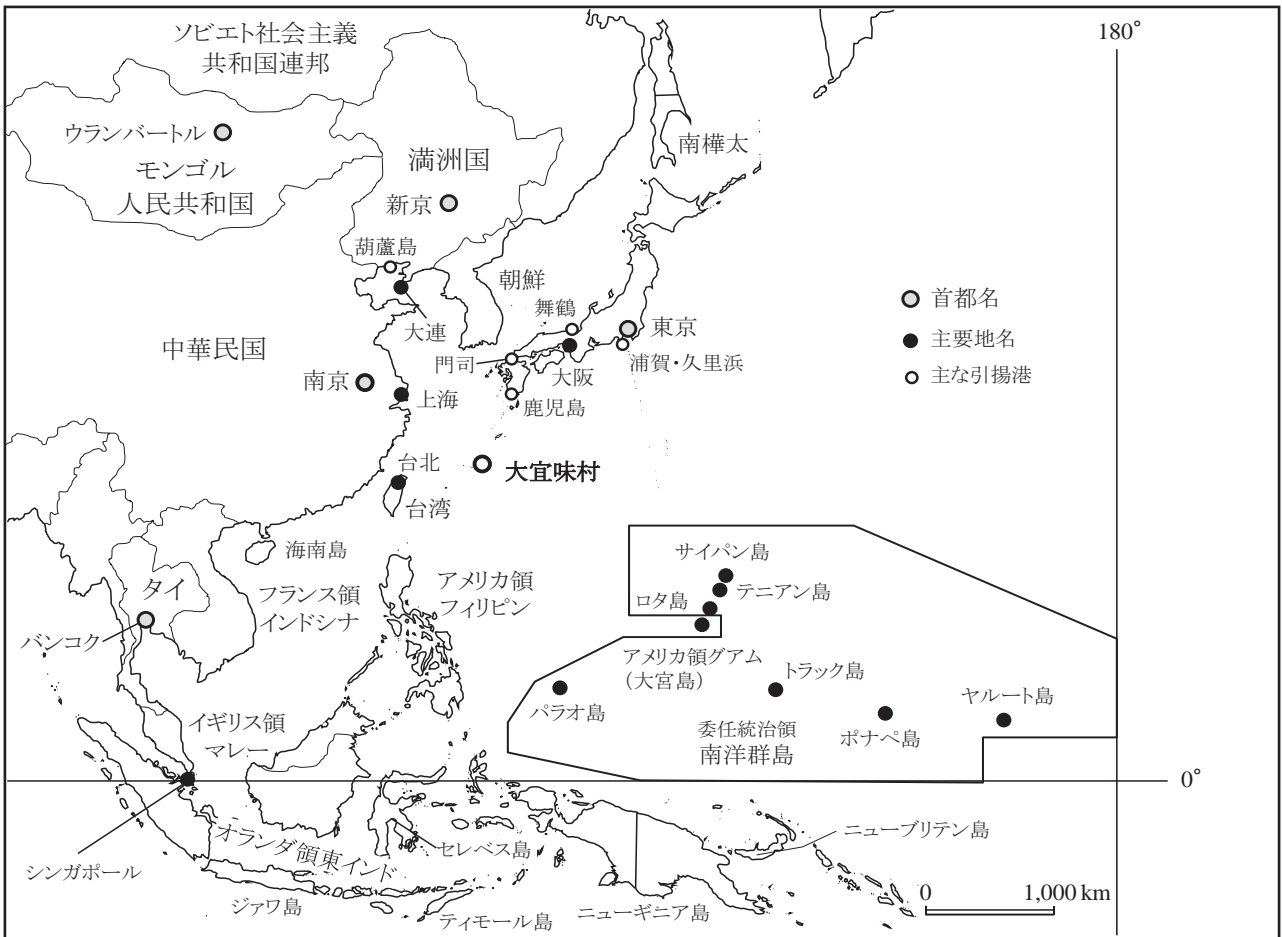
# 大宜味村の シンガポール移民



大宜味村の  
インドネシア  
(ジャバ)  
(セレベス)  
ワスワ  
移民



# 第二章 外地引揚げ



## 外地からの引揚げ状況概要

この章は、太平洋戦争以前にいわゆる外地へ移住した大宜味村関係者の名簿・各種資料を掲載している。ここでいう外地とは、近代日本が領有した勢力圏のうち、内地（四十七都道府県）と対比される地理的範囲である。一般的には台湾や朝鮮などの植民地、委任統治領の南洋群島、満洲国、南方占領地であるフィリピンやシンガポールなどが該当する。

ハワイやブラジルなど外国への移民の場合は、渡航に必要な旅券（パスポート）が発行された人の名簿や移民船に乗船した人の名簿など、移民の記録が必ず残されている。しかし、日本国内と同じ扱いの外地への移住は、移動に制約が無いためにそのような記録が存在せず、大宜味村から外地への地域に誰が移住したのか、基本的なことさえ正確には把握できない。このように記録的に制約がある外地への移住であるが、第二次世界大戦終結後に全員が内地へ強制的に引揚げさせられたため、引揚げ乗船者名簿や引揚者に対する戦後補償の記録を用いることで、外地移住者の大部分を確定することができる。

本章で掲載した「引揚者給付金請求書処理表」は、一九五七（昭和三十一年）年に施行された引揚者給付金等支給法に基づき、給付金を申請した者（遺族を含む）の一覧表である。米軍統治下にあった沖縄地区でもこの日本政府の給付金は支給され、各市町村役場に設置された沖縄外地引揚者協会の市町村支部ごとに事務処理がされた。掲載した一覧表は大宜味村役場で給付金申請された記録をもとに、他市町村役場で対応して記録化されている大宜味村関係者を加えて作成した。

この処理表を集計した字別・在外地別人数の表をみると、大宜味村関係者のうち、外地からの引揚者、すなわち終戦時に外地で居住していた人は一、一六二人を数える。一九四一（昭和十六）年の大宜味村の本籍人口は一三、九六八人であるので、対人口比は八％に達する。在外地域別にみると、委任統治領の南洋群島が六六一人と最も多く、次いで台湾（一七七人）、中国（八〇人）、満洲（六七人）、フィリピン（五〇人）の順である。

また、本籍字別にみると、喜如嘉が一七二人と最も多く、次いで塩屋（一四三人）、田嘉里（一三九人）、大兼久（一三七人）、根路銘（一〇〇人）が移住者一〇〇人以上の集落である。そして、村内の十六字（昭和三十二年当時）全てに外地引揚者が存在する。すなわち、戦前期に大宜味村の全

集落から外地に移住していたことが確認できる。

大宜味村からの移住が最も多い在外地域は、先述のとおり南洋群島である。一九一四（大正三）年の第一次世界大戦をきっかけに、日本海軍がドイツ領ニューギニアを占領した。その後、一九二二（大正十一）年に国際連盟から、その赤道以北は日本を委任国とする委任統治領南洋群島として認められた。現在のパラオ共和国、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島共和国および北マリアナ諸島自治連邦区が含まれる。大宜味村関係者の移住先を詳細にみると、パラオ支庁が四五五人と際立つて多く、サイパン（六十二人）、テナアン（五十二人）、ロタ（十七人）を合わせたサイパン支庁（計一三一人）が相対的に少ない。これは国頭村、東村など国頭地域の村々に共通する傾向である。

パラオ支庁は南洋群島の行政の拠点である南洋庁が設置されたコロル島をはじめ、大小様々な島から成り立っている。パラオへの移住者が村内で最も多い喜如嘉（一一八人）や二番目に多い大兼久（九六人）の各字誌によると、大宜味村内で鰹漁業に従事していた人々が、近海の漁獲量が減少したために、南洋群島パラオに出漁・定着したのが移住の始まりとしている。ただし、パラオで漁業を継続した人もいたが、ペリリュー島の飛行場建設などの軍工事や、南洋庁発注の公共事業工事など高賃金が期待できる各種土木工事に転業する者も多かった。このほか、喜如嘉や饒波出身者を中心にパラオでも大工として建築関係の仕事をする者が多く、南洋でも「大宜味大工」の名を広めていた。大宜味村からの移住者はコロル市街地の中では南海楼という料亭付近のコロル五丁目に集住しており、大宜味村人會も結成して相互扶助を行っていた。

一方、サイパン支庁の三島では、南洋興発のサトウキビ農場で働く者、同社の製糖工場で働く者が多かった。特に大宜味村出身者は会社の施設建築に携わる仕事に就いていた人が多いことが特徴である。この南洋興発は一九二二（大正十一）年に設立された製糖会社である。製糖業からスタートして農園業、水産業、鋳業、交通運輸業など多角的に事業を拡張し、南洋における最大の企業グループになった。事業地もサイパン支庁から南洋群島全域に及んだ。そのためポナペ支庁のポナペ島でも、南洋興発の農場で働く大宜味村出身者も多かった。

台湾は一八九五（明治二十八）年に日本が獲得した最も古い植民地である。大宜味村からは根路銘（四十六人）、塩屋（二十九人）などから多くの移住者を出している。台湾で大宜味村出身者は、農業、工業、漁業、建



設業など幅広い職業に就いていること、台湾総督府に採用されて官吏、教員、鉄道職員など植民地社会の運営に関与した者が多かったことに特徴がみられる。同様な傾向は満洲や朝鮮でもみられる。

このほか、外南洋に目を向けると、アンボン（十三人）、ジャワ（十人）などのオランダ領東インド（計三十四人、現インドネシア）やシンガポール（十二人）へ移住した大宜味村民の多くは漁業に、フィリピンではミンダナオ島ダバオ（三十九人）を中心にマニラ麻の栽培に従事する農業移住が多かった。

このように、在外地域ごとに大宜味村出身者が従事した職業に特徴が見られる。また、本籍字ごとに特定の在外地域、特定の職業が見られる場合がある。これは、大宜味村から外地へ移住する時に、地縁・血縁によるネットワークを利用して渡航をしているためで、いわゆる「チェーンマイグレーション（連鎖移動）」が形成されていた。

ところで、この表では在外地域を印度とする大宜味村関係者が五人いる。これは印度に定住していたわけではない。第二次世界大戦における日本開戦時にシンガポールやマレー半島などイギリスの植民地にいた多くの日本人は即座に逮捕され、インドに連れて行かれてそこで終戦まで抑留されていた。表を見る際は、このことに留意する必要がある。

次の「建物竣工届け関係書類」は、大宜味村塩屋出身の松本末一がポナペ島コロニア町に料理屋を建築するために、ポナペ支庁長に提出した関係書類の一式である。『沖縄県史資料編十七 旧南洋群島関係資料近代五』から転載したが、オリジナルはハワイ大学ハミルトン図書館所蔵の太平洋信託統治領アーカイブスのマイクロフィルムにある。掲載書類は経歴書、建物設計平面図、資産証明願、官有貸下地内建物（工作物）建設竣工届、官有貸下地内家屋建築許可願の五点で、最後の建築許可願には、建物設計及仕様書と建築物設計図が添付されている。松本が建築申請したコロニア町新地は、市街地の南東端に位置し、ポナペホテルを中心に、満月や風月、末廣といった料亭が立ち並ぶ歓楽街である。

経歴書によると、申請者の松本末一は一九〇一（明治三十四）年に大宜味村田港に生まれる。塩屋尋常小学校を卒業後、名護町で四年、大東島で二年半の勤務を経て、一九二三（大正十二）年に南洋群島に渡っている。渡南後はサイパン島南ガラパンで雑貨店を、次いで酒販売を兼ねた飲食店を経営したうえで、一九三〇（昭和五）年にポナペ島へ来て、土木請負業に転じている。今回、料理屋営業用建物の建築申請をしているので、松本

末一は、数年おきに居住地を変え、業種を変えながら、より儲かるビジネスを追求している姿が伺える。

このように、居住地および職業の流動性の高さは、南洋群島に移住した大宜味村民に共通している。大宜味朝徳が琉球新報（昭和十四年十月十五日付）に寄稿した「南洋三巡記」のヤルト便りでは、南洋群島最東端のヤルト島でも大宜味村出身の金城森正が公学校（島民と呼ばれた現地の人々の子供が学ぶ学校）の教員として勤めていることを紹介している。このように、南洋群島における大宜味村民の活躍の舞台は、西はパラオから東はヤルトまで広がっていた。

このように、大宜味村出身者が様々な分野で活躍をしていた南洋群島であつたが、ミッドウェー海戦での敗退を契機に中部太平洋方面で戦局が悪化すると、日本政府は一九四二（昭和十七）年十二月に、年齢六十歳以上および十四歳未満の老幼婦女子に対して、日本本土に「疎開引揚」を命じた。海外移住組合連合会の報告書によると、南洋群島からの終戦前引揚者は一九四三（昭和十八）年から一九四四年にかけて一六、三八六人に上つた。そのうち、沖縄県本籍者は六、一三六人と全体の三十七%を占めていた。『南洋群島引揚者名簿（終戦前）』、南洋群島海没者名簿』は一九六一年九月に琉球政府内務局が発行した名簿で（原簿は南洋群島協会が一九五七年に作成）、南洋群島から日本本土に引揚げた全国一、六〇六名が掲載されており、そのうち、本史では大宜味村関係者二四世帯七八人を収録した。引揚げの途中で米軍潜水艦などの攻撃により沈没した船も多く、本籍喜如嘉の稲福勝子や赤城丸（一九四四年一月十七日にトラック島沖で沈没）に乗船していた前田和子の名が海没者名簿に見られる。

大宜味村関係者で引揚げ途中の海没者はこの二人だけではない。沖縄外地引揚者協会が昭和三十七年に発行した『強制引揚海没者名簿』によると、「疎開引揚」の途中で海没した沖縄県関係者は四二三人を数える。そのうち、大宜味村関係者は神島丸に乗船していた大山千代と四人の子供、照国丸に乗船していた島袋浪子と二人の子供、および池原トシ子とその弟、南零丸に乗船していた山川エミ、山城永藏、平良三代、サイパン丸に乗船していた比嘉鍋太郎、船名は不明だが山城カメとその長男、の計十六人の尊い命が南洋の海で犠牲となった。ただし、この名簿には稲福勝子と赤城丸犠牲者の前田和子の名前がない。すなわち、どちらの名簿も完全なものではなく、大宜味村関係者の強制引揚者、海没者は名簿記載者以外に存在する可能性が高いことに留意する必要がある。

老幼婦女子が強制的に疎開引揚げした後の南洋群島には、労働力、防衛力として期待できる青壮年の男子が残される形となり、彼らの力を集結した総力戦体制が構築されていく。ついには、それまで徴兵猶予願いの提出により兵役から免れていた南洋群島在住男子も現地召集され、現地軍に配属されていった。『パラオ現地応召者名簿』は米国議会図書館が所蔵している「南洋庁コレクション」に収録されており、南洋庁西部支庁の作成である。これをもとに『沖縄県史資料編十七 旧南洋群島関係資料』では沖縄県本籍者を収録しており、本史では大宜味村関係者一〇九人を抄録した。第二次世界大戦の終結後、外地から大宜味村に引揚げた人々にとって、大宜味での生活は経済的に厳しい状況にあった。そのため、特に南洋群島からの引揚者は、南洋への再移住を強く希望する者が多く、一九四八（昭和二十三）年に南洋群島帰還者会（初代会長 仲本興正）を結成して、米国民政府に再移民許可のための運動を展開した。その一環として引揚者を対象とした意向調査が実施された。それが『南洋帰還者調』で、調査時現在の引揚者の状況とともに、南洋群島在住時の状況や再移住の希望について調査している。調査に参加した大宜味村関係者五〇人の集計結果を掲載した。

これによると、生活程度が南洋時代は豊かだったか、大宜味に引き揚げた後は経済的に困っていると認識している人が多いことが読み取れる。五〇人中、四十一人までが再移住を希望しており、大多数がかつて住んでいたパラオへの再移住を希望しているが、その他の地域と答えた者も十三人と多い。その他の地域は具体的にはわからないが、戦後移民が再開されたブラジルやアルゼンチンなど南米の国々であったと推測される。

外地に移住した大宜味村関係者に関する資料は少ない。そのため、本史に収録した引揚げ関係資料は非常に貴重な資料と言える。資料を多面的に読み解くことで、外地での大宜味村関係者の実態が明らかになることが期待できる。

引揚者給付金請求書処理表 字別・在外地別人数

本籍字	台湾	朝鮮	満洲	中国	南洋群島	フィリピン							不詳	南領東インド				不詳	ビルマ	シンガポール	グアム	印度	豪州	ニュージーランド	ペル	不明	合計					
						サイパン	テニアン	ロタ	ヤップ	パラオ	トラック	ポナペ		マニラ	ダバオ	レイテ	アンボ											ボルネオ	ジャワ	ニューギニア	アンボ	ボルネオ
田嘉里	7	0	11	35	81	9	0	3	0	68	0	1	2	2	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	139		
謝名城	8	1	0	0	12	0	0	1	0	8	2	1	8	0	8	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	35		
喜如嘉	13	4	4	5	128	2	0	2	0	118	4	2	2	1	1	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	1	10	2	172			
饒波	11	0	4	3	21	0	5	0	0	16	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	44			
大兼久	20	4	5	7	97	1	0	0	0	96	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	137			
大宜味	8	0	2	1	5	0	0	0	0	3	0	2	6	0	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	25			
根路銘	46	0	8	6	19	4	9	0	0	6	0	0	0	0	0	10	1	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	10	100			
上原	1	1	0	2	36	10	0	2	0	8	0	16	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	45			
塩屋	29	6	15	13	64	5	23	1	1	27	4	3	1	0	1	2	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	3	143				
屋古	3	0	0	0	27	14	7	2	0	0	0	4	1	1	0	6	5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	38			
田港	5	1	3	0	23	6	4	0	0	8	0	5	0	0	0	5	4	0	0	1	0	0	0	0	0	0	11	2	51			
押川	0	0	0	0	26	0	0	0	0	8	0	18	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	28			
大保	0	0	1	0	11	0	1	0	1	7	1	1	2	2	0	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17			
白浜	9	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	16			
宮城	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6			
津波	14	0	5	1	23	0	0	0	0	16	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	44			
その他	3	0	7	7	86	11	3	6	1	65	0	0	17	2	15	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	122			
合計	177	17	67	80	661	62	52	17	3	455	12	60	50	9	39	1	1	34	13	1	10	2	8	5	12	1	5	4	1	25	23	1,162

## 引揚者給付金請求書処理表

沖縄外地引揚者協会調

田嘉里

	氏名	人数	現住所	本籍地	渡航年月日	在外地域	外地出発港	本邦上陸地	上陸年月日	認定番号	備考
1	安里 重雄	1	大宜味村字田嘉里551	大宜味村字田嘉里551	\$15.6.25	南洋	セラム	田辺	\$22.7.20	96	
2	池原 安次郎	1	〃	〃	T8.2.5	ポナペ	ポナペ	浦賀	\$20.12.26	420	
3	池原 安定	1	那覇市繁多川375-28	〃	\$15.12	廣東	長州島	浦賀	\$21.4	60	
4	池原 安助	3	大宜味村字田嘉里17	〃	\$13.5.15	パラオ島	アイトライ	久場崎	\$21.2.12	1112	
5	池原 安久	3	〃	〃	\$13.12.10	満	コロ島	仙崎	\$21.6.10	3379	
6	池原 安徳	1	〃	〃	\$11.8.18	比	マニラ	鹿児島	\$20.10.31	31137	
7	大嶺 秀太郎	1	〃	〃	\$14.10.3	中国	廣浦	浦賀	\$21.4.7	737	
8	大嶺 巖	1	那覇市松尾245	〃	\$18.5	満	コロ島	仙崎	\$21.7	36219	
9	神里 富久	1	大宜味村字田嘉里168	〃	\$17.11.20	満	ウラジオ	舞鶴	\$23.8.14	417	
10	神里 富一	1	〃	〃	T12.12.15	サイパン	サイパン	久場崎	\$21.2.28	422	
11	神里 美江	1	〃	〃	\$18.10.25	満	コロ島	宇品	\$21.10.11	26017	
12	神里 富良	4	東村字宮城373	〃	\$9.4	サイパン	サイパン	久場崎	\$21.3	6110	
13	金城 妙子	1	石垣市崎枝194の8	〃	\$20.7.30	台	基	久場崎	\$21.10	39304	
14	金城 誠基	3	大宜味村字田嘉里539	〃	\$6.10	パラオ	アイトライ	久場崎	\$21.2.6	281	
15	金城 誠禄	2	石垣市崎枝194の8	〃	\$17.1.20	台	基	久場崎	\$21.8.13	25008	
16	金城 亀助	7	大浜町字桃里201	〃	\$14.10.3	南支	黄浦	浦賀	\$21.4.4	22446 22447	
17	金城 精五郎	4	大宜味村字田嘉里733	〃	\$3.3.3	サイパン	サイパン	久場崎	\$21.3.5	414	
18	金城 亀一	6	〃	〃	\$9.5.27	パラオ	アイトライ	久場崎	\$21.2.4	27208	
19	金城 精基	1	〃	〃	\$18.7	満	コロ島	舞鶴	\$23.4.25	28774	
20	金城 亀松	3	大浜町桃里165	〃	\$9.2	南洋	コロール	久場崎	\$21.1	38220	
21	島田 真孝	5	真和志大道20の6	〃	\$12.2.27	パラオ島	アイトライ	久場崎	\$21.3.1	4344	
22	島田 八重子(金城)	1	那覇市与儀196	〃	\$18.4.21	満	大連	博多	\$22.3.12	28776	
23	玉城 長順	1	那覇市国場648	〃	\$10.10.25	パラオ	アイトライ	久場崎	\$21.3.4	32306	
24	玉城 長保	1	国頭村字浜179	〃	\$13.6	パラオ	パラオ	久場崎	\$21.2	26669	
25	玉城 深二郎	2	那覇市二中前34	〃	\$16.3	台	基	久場崎	\$21.11	33884	
26	玉城 美吉	1	大宜味村字田嘉里406	〃	\$12.9.20	蒙州	メルボルン	浦賀	\$21.3.13	12939	
27	玉城 長吉	1	〃	〃	\$4.1.19	パラオ	アイトライ	久場崎	\$21.3.4	31931	
28	玉城 助一	1	〃	〃	\$16.2	佛印	西貢	宇品	\$21.5.11	28123	
29	平良 新福	8	〃	〃	\$14.10.13	中国	黄浦	浦賀	\$21.4.7	17162	
30	知念 嘉清	3	〃	〃	\$5.8.15	パラオ	アイトライ	久場崎	\$21.2.28	1114	
31	知念 森彦	3	東村字宮城343	〃	\$8.1.19	パラオ	パラオ	久場崎	\$21.2.25	14045	



旧南洋群島関係資料 近代五  
『沖繩県史 資料編十七』(23～27頁)

建物竣工届け関係書類一

経歴書

本籍 沖繩県国頭郡大宜味村字田港六百九拾貳番地  
住所 ポナペ島コロニア町

戸主末吉長男

土木請負業

松本 末一

明治三十四年五月十五日生

学業

一、大正三年三月

大宜味村塩屋尋常小学校卒業

経歴

一、自大正三年四月

至 同七年八月

沖繩県国頭郡名護町松川商店ニ勤務

一、自大正七年十一月

至 同十年三月

沖繩県大東島東洋製糖株式会社耕地牧野豊一方ニ於テ人夫監督トシテ勤務

一、自大正十二年五月

至 同十五年八月

南洋サイパン島ニ来島シ同島南ガラパン町□目ニ丁目ニ於テ雜貨販売営業ニ従事ス

一、自大正十五年九月

至 昭和五年九月

同島同町ニ於テ飲食店竝ニ酒類販売営業ニ従事ス

一、自昭和五年十二月

至現在

ポナペ島へ来島シ同六年八月ヨリ土木請負業ニ従事スルコト現在ニ及ブ

一、賞罰

共ニナシ

右之通相違無□候也

昭和十年十二月二十七日

右 松本末一

建物設計平面図

所在 ポナペ島コロール町ナントムル

出願人 松本末一

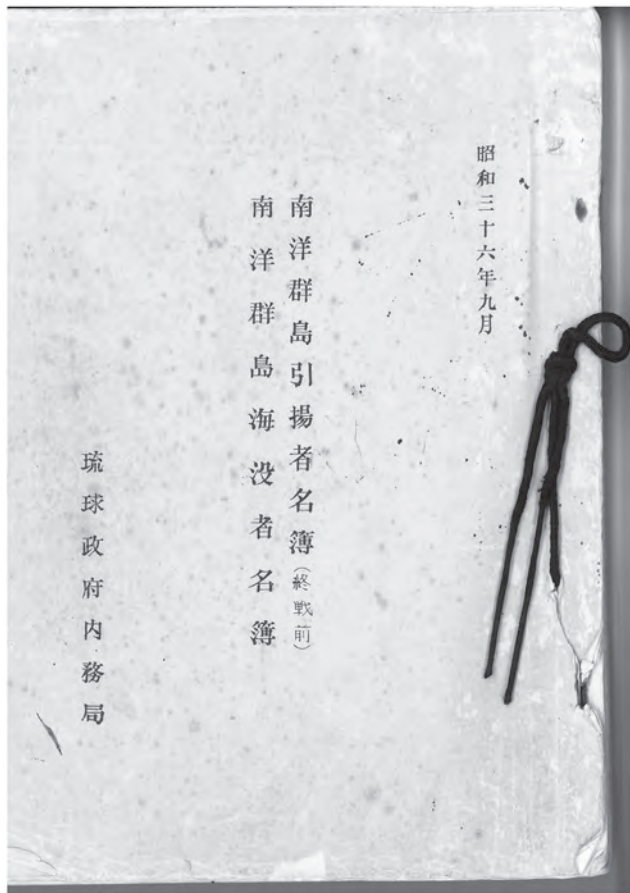
一、建物平面図

内訳(イ) 客間(ロ) 女中部屋(ハ) ベランダ(ニ) 廊下

(ホ) 押入(ヘ) 便所(ト) 洗濯室

(チ) 湯殿(リ) 調理場(ヌ) 帳場(ル) 玄関(ホ) 床間

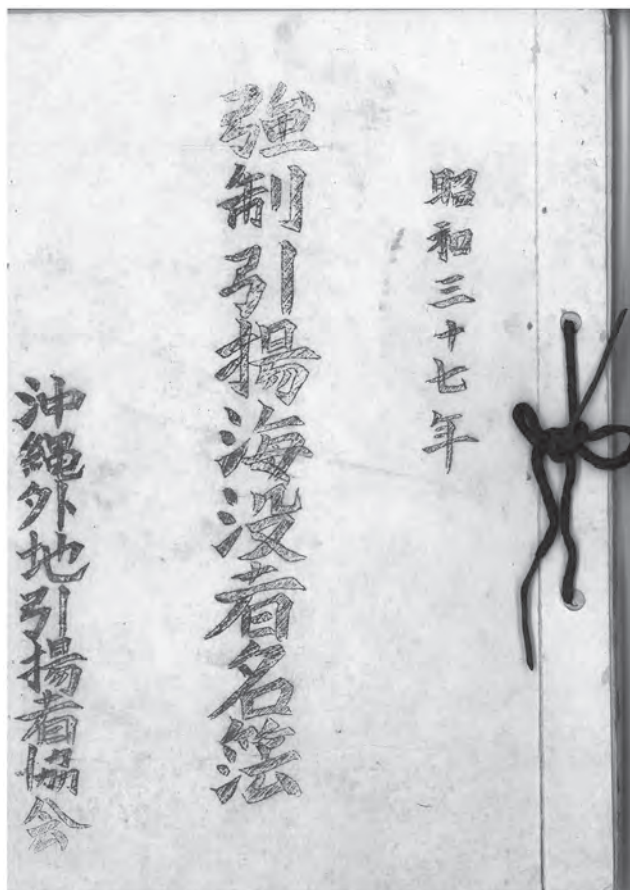




南洋群島引揚者名簿（終戦前）南洋群島海没者名簿  
琉球政府内務局 今帰仁村歴史文化センター所蔵

れた。津嘉山常光、仲村渠正徳、仲村渠三郎、大城全徳氏等島民相手の雑貨店を営み大城全徳、長嶺宇志氏等雑漁業に従事して成果を挙げてゐた。大宜味村出身の金城森正君が同島の公学校に安村健永君が支庁の財務課に勤めてゐた。其他照屋亀助、新城清一、伊差川英正、金城忠助、仲村渠良助、比嘉蒲、山城蒲助等県人会の中堅を為してゐる。  
ヤルト島は島の小さい割合に商店が多く商業的進出は困難と思はれるが水産業は同島を拠点として外南洋への鮪漁業が南拓によって計画されてゐるが将来注目されてゐる。

『沖縄県史資料編十七』新聞集成（751〜753頁）



強制引揚海没者名簿 今帰仁村歴史文化センター所蔵

## 第三章 ―

# 県内移住

## 第一節 八重山開拓移住

### 戦後八重山開拓移住の背景と経緯

#### 戦前からの移民ムラ

「山原に行けば 哀れどや至極 見る方やないらぬ 海と山と（山原に行くとすぐ哀れを感じる。見るものはなにもなく海と山しかない）」と歌に詠まれるほど、山原と呼ばれる沖縄本島北部地域は、山々が海岸近くまで迫る独特の地形を有し、人々は山を背に海を前にした僅かな平地に集落を形成し、狭隘な耕地で作物をつくり山から木材や薪炭を積み出し、細々と自給自足の生活を維持してきた。

大宜味村もその例にもれず、ほとんどの集落が海岸線の僅かな平地に肩を寄せ合うように家々が集まり、山の頂上まで続く段畑から日々の糧を得るという生活で、たびたび襲ってくる台風や干ばつなどによって、時には餓死者が出るほどの厳しいものであった。そのため、土地は跡取りとなる長男が受け継ぎ、二男、三男は早い自立を求められ、一〇代で奉公に出されたり自ら生きる道を求めて、村外或いは海外まで出て行かざるをえない土地柄で、戦前から「移民ムラ」の異名を持つほど、移民・出稼ぎが多かった。

#### 第二次世界大戦敗戦によって人口が急増

そのような素地の上に、第二次世界大戦における日本の敗戦で、国策によって推進された海外・県外の移住・出稼ぎ者が、ほとんど丸裸に近い状態で、強制的に故郷に引き揚げさせられたのである。そのために、戦前約八千人だった村の人口が、一挙に一万一千三百六十九人（一九四七年現在）に増大した。『津波誌』には、当時の状況が次のように記されている。

【一九四六（昭和二一）年末までに県外から故郷津波への引き揚げは完了したのである。実に一千名にも達する人口。食料は軍からの配給だけでは足りず、村有林まで開墾しても埒があかず家を建てようにも屋敷がなく、段畑へ登らなければならない状況であった。『津波誌』（二〇〇四年）】

#### 新開地八重山に希望を託す

当然、食糧事情は逼迫した。このような状況は、大宜味村に限られたことではなく、当時の沖縄の全般的状況でもあり、人口、食糧自給の対策は喫緊

の課題であった。そのため、沖縄諮詢会では、一九四六（昭和二一）年に琉球自立経済再建の緊急対策として、八重山開拓移住計画（沖縄本島より一万戸・五万人を八重山開発移民として送る）が施策された。その発表と同時に、移民ムラの実績がある大宜味村は、早速その計画を村として取り上げた。それを裏付けるように『大宜味村議会史』には「八重山開拓移住推進」の項に、次のような経緯が記されている。

【山地多く可耕地の少ない大宜味村は、増加する人口を抱えることができなため、戦前から海外移民の多い村であった。戦後も本島中南部から来ていた戦争疎開者が去る一方、いわゆる外地引揚者の帰郷や軍人の復員により、終戦四年目の昭和二三年になっても人口はなお一万人を超えていた。

このようななか、昭和二三（一九四八）年一〇月一日、米軍政府と沖縄民政府による八重山開拓移住計画が公表（新聞報道）されたことから、いち早く大宜味村から送り出しの機運が高まり、この年一月三日の第七回臨時議会で、山口忠次郎議員らの提案により、村是（正しい方針）として八重山開拓移住を推進すること、そのため現地視察団を派遣することを決定した。翌二四（一九四九）年一月八日には、大宜味村として八重山開拓移住推進の陳情書を政府（沖縄民政府）へ提出するに至った。『大宜味村議会史』（平成一八年）】

大宜味村当局が提出した八重山移民促進の陳情書を受け、沖縄民政府と米軍は、再度現地調査を行い、開拓計画を樹立した。ところが、アメリカ国防省では、「講和会議締結まで琉球人を大量に移動させることはできない」という回答が示された。

しかし、既に僅かばかりの田畑や家屋敷を売却して待機していた移住希望者を抱えている大宜味村では、政府の動きを見守る余裕はなく、山口忠次郎ら代表三名を、村費補助によって現地八重山へ派遣し、直接交渉にあたらせた。

彼らは八重山民政府（吉野知事）と大浜町（星町長）に入植の交渉を行い、桃里の俗称ジング山に大宜味村より四〇戸、地元から一〇戸、計五〇戸の開拓移住地を創るという契約を単独で結んだ。その頃八重山では、食糧自給体制の確立が焦眉の急務となっており、現地関係当局はその受入れの協力体制をとった。その経緯は、前掲『大宜味村議会史』で詳らかにされている。





陸軍車両に家財道具を積み込む大宜味村の住民 1953年（沖縄県公文書館蔵）



石垣に出発する前、友人に別れを告げる大宜味村の住民 1953年（沖縄県公文書館蔵）

【しかしその後、政府の計画が進展しないため、山口議員他有志二名（山城忠助、山城忠次郎）が二月一日から現地調査に派遣され、石垣島ジンギ山への入植四〇戸を八重山民政府・大浜町と契約した。これにより大宜味村単独で送り出す方針をとり、一九五〇（昭和二五）年三月二日、第一次自由契約八重山開拓移住団一行（三〇戸一七〇名）の壮行会が、村を挙げて村議会本会議場で行われた。

山口忠次郎団長ら先発隊一六名は、この年三月一六日、ジンギ山（後の星野部落）に入植、その家族第一陣が九月一日入植した。戦後八重山移住のはじまりである。『大宜味村議会史』】

### 大宜味村の単独・自力入植と関係機関の動き

一九五〇（昭和二五）年三月十六日（後に入植記念日となる）、先遣隊十六名が現地に到着、二十日後に現地側五名、大宜味より九名が続いて到着し、四ヶ月間の共同作業によって約十町歩の伐採開墾をなし、芋の植付や耕地の一次配分、仮住宅の建設などを行い家族引越に備え、七月中旬に一旦帰郷した。この家族引越のためには軍船を利用し、大宜味―星野の間十四日を要した。最初の移住者が家族と共に再び八重山の土を踏んだのは八月中旬頃であり、それから本格的な開墾に入っていく。

しかし、未開の大地を切り拓くことは想像を絶する困難を伴った。入植者全員が外地引揚者（主に比島、内南洋）や復員軍人などで、丸裸に近い移住民であるため、入植準備の資金も少なく、政府の営農資金、開墾補助金も短期間の生活を支えるために消えて行った。

入植直後の生計は新、樽用資材を伐り出し、海水を炊いて塩をつくって得た現金収入と、陸稲と落花生という換金作物で維持しなければならぬのに、土質が悪く労働力に見合った収穫が上がらなかつたことに加え、行政当局の営農指導の失敗が入植者の生活困難に拍車をかけた。

更に、気象災害（台風、旱魃）、猪、野鼠、病害虫、牧牛による被害など、背水の陣で挑んだ入植者の努力と忍耐を試すかのように次々と襲う。

生活資金を稼ぎつつその合間に開墾をする状態では、仕事は遅々として進まず、雨続きで薪を運搬することができなくなり、金も底をつき、頼みの食糧（甘藷）は猪に喰い荒され、マラリアが流行しはじめ、若い人達が離農を凶るなど一大危機にあつたとき、母村から温かい救済の手が差し伸べられた。山口忠次郎はその時の胸中を次のように回想している。

【大宜味村長（宮里金次郎）が全村民の浄財による三万円余（B円軍票・一ドル＝二〇B円＝三六〇日円―引用者注）の大金と救援食糧を携え、激励に来島された時は、「地獄に仏」のたとえがあるが、全く蘇生の思いがした。この尊い賜物によって各戸に一頭の子豚を買い入れ、学校敷地の整備資金となし、共同売店発足の資金となつて、この恩恵は今日まで続いている。『星野部落三十年のあゆみ 開拓』】

このような経緯で、八重山開拓の最初の鍬は、大宜味村がどこよりも早く、八重山の大地に振り下ろしたのである。政府の計画が実行に移されるのを待てなかつた五六戸・二四三人（一九五〇～五二年四月第四次まで）の集団移住により、星野、伊野田部落が創設された。

一九五二（昭和二七）年八月の政府による初の計画移住で西表仲間地区に三二戸、一九五三（昭和二八）年の二〇戸入植による大里部落創立と時を同じくして、西表豊原団にも八戸が入植している。翌一九五四（昭和二九）年、野底栄団に三戸、一九五五（昭和三〇）年四月、明石団に二二戸、一九五六（昭和三一）年、久宇良団に一八戸と大宜味村からの入植は続いた。

移住者が語る開拓の足あと

大富（西表）座談会

平成二十六年十月二十八日 於…大富公民館

参加者

- ・平良 苗 (謝名城出身) 九四歳
- ・大嶺 茂子 (謝名城出身) 八四歳
- ・金城 正 (大兼久出身) 八六歳
- ・平良さち子 (大兼久出身) 七九歳
- ・福地 利供 (喜如嘉二世)
- ・平良 章 (謝名城出身) 六三歳
- ・山城 吉輝 (喜如嘉出身) 六四歳
- ・稲福 和美 (謝名城出身)
- ・山城まゆみ (大富公民館館長・県外出身)

豊原（西表）座談会

平成二十六年十月二十八日 於…金城えつさん宅

参加者

- ・金城 えつ (喜如嘉出身) 八二歳
- ・山城 スミ (大兼久出身) 八七歳
- ・金城 千代 (喜如嘉出身) 九一歳

星野 座談会

平成二十六年十月二十九日 於…星野公民館

参加者

- ・大城 森英 (謝名城出身) 八七歳
- ・大城 初枝 (田嘉里出身) 八四歳
- ・宮城 春 (田嘉里出身) 九一歳
- ・大嶺 苗 (田嘉里出身) 八七歳
- ・金城 政男 (喜如嘉二世)
- ・平良 晴美 (謝名城二世)

伊野田 座談会

平成二十六年十月二十九日 於…伊野田公民館

参加者

- ・山城 嵩信 (田嘉里出身) 八五歳
- ・仲村 哲雄 (田嘉里出身) 八十歳
- ・金城 保夫 (田嘉里出身) 七六歳
- ・金城 丈訓 (田嘉里出身) 七五歳
- ・金城 由久 (伊野田公民館館長・田嘉里二世)

明石 座談会

平成二十六年十月二十九日 於…明石公民館

参加者

- ・真喜志徳正 (大保出身) 八三歳
- ・吉川 憲光 (塩屋二世)

久宇良 座談会

平成二十六年十月二十九日 於…久宇良集落

参加者

- ・宮城 茂正 (塩屋出身) 七一歳
- ・宮城 勝 (塩屋出身) 七八歳
- ・宮城サエ子 (塩屋出身)
- ・宮城 昌春 (塩屋二世) 五三歳

大里 座談会

平成二十六年十月三十日 於…大里公民館

参加者

- ・山川 ヨシ (喜如嘉出身) 九十歳
- ・真喜志フサ子 (大保出身) 八九歳
- ・真喜志篤之 (大保出身) 七八歳
- ・真喜志茂夫 (大保出身) 七八歳
- ・野里 節子 (謝名城出身)
- ・平良 幸範 (大保出身)

※年齢は調査当時

福地利供—いくちないがでい（いくつになりますか？）

金城正—や—もう恥ずかしくて。年寄りなのに、年は言わない。

新城—十八ですか？

平良さち子—九十七かな八かな。

大嶺茂子—私は謝名城から来ました大嶺茂子です—八十四歳。大嶺姓一軒だけあります。

河津—じゃあすぐ分かりますね。

大嶺茂子—あなたと親戚なってるらしいから宜しく願います。親たちはみんな従弟。

河津—そうですか、宜しく願います。

平良さち子—私は大兼久の平良さち子です。私明日でね、満八十一歳。

山城吉輝—僕は喜如嘉出身で山城吉輝といます。親父がね、山城寅四郎とい

います。鍛冶屋がないということ、こっちに移民してきたような

かんじです。カンザヤー（鍛冶屋）。

平良章—今ではね、スナックカンザヤーの長男。

新城—いいですね。

山城吉輝—そういうことです。六十四歳です。

平良苗—な—、うっさんな—な—（もうそんなになつたの）？

平良章—今日は本当お疲れさんです。私は謝名城で生まれて満一歳のときに

親に連れられて、で物心ついたのがここ西表大富です。平良章と申しま

す。六十三なります。ちなみにね、平良苗はうちの母です。宜しく

お願いしますね。

河津—ありがとうございます。

平良章—大富公民館長も。

山城まゆみ—私は移民して来てないよ。

新城—館長さん、一言。

山城まゆみ—この集落はおじいおばあ達の汗と涙の上に築かれていますから、

本当に感謝していますよ。

福地利供—喜如嘉出身の山城感兆さんの嫁。

山城まゆみ—入植してきたのが夫の父山城感兆です。

平良苗—お母さんが謝名城。

山城まゆみ—喜如嘉と謝名城か。ハーフだ。

平良さち子—学校はひとつだが部落はちよつと離れている。

新城—一世の方は？

福地利供—これだけ。

平良苗—四名しかいないよ。あとは平良さち子の旦那平良ひでお—一期生に

は男一人、女が三名。

平良さち子—私は四年後にがこっち来たから。

新城—どんないきさつでここに？新しい暮らしを求めてという感じですか？

平良さち子—二男、三男で土地がないから。

新城—もともと山原で生まれて山原で生活してたのを、もう二男三男はあ

ちで生活できないから、こっち行こうという誘いがあつたんですか？

平良苗—誘いというより自分たち土地がなかったら行こうと思つてからし、

前は内地によく出稼ぎに行つたさ、男も女も。

新城—来るときは、この部落から何名とか募集みたいな、申し込みがあつて、

家族で渡つてきたという形ですか？皆さんおいくつぐらいの時に来てる

んですか？

平良苗—福地のおじい団長として。

福地利供—おじい団長でね、あの時募集があつてね。それで親戚誘い合つ

て来たわけなんですよ。

平良章—星野は自由移民で行つていますね。

平良さち子—こっちは政府の計画で。

平良章—第一号というかたち。計画移民としての。

平良さち子—第一次移民さ、こっちは。

新城—来た時はどんな状態だったんですか？

平良さち子—四年後に来たけどよ、もうみんなきれいにされておつた。

福地利供—あの頃はね、もう鬱蒼たるジャングル、全部。それで特に入れる

場所もなかったんですよ。

平良さち子—歩く道もなかった。

平良苗—道さえ何もなかった。

新城—平地ですよ。

福地利供—いや、平地じゃないよ。今は学校もきれいに出来て体育館もあり

ますけどね。その中間だけ窪んだ湿地帯で、この一帯は鬱蒼と木が沢山

生えていたんですよ。カブラというんですけど、方言。名前が出てこな

い和名が。

平良章—オオバイヌビワ。

福地利供—イヌビワか。こういう木がいっぱい生えていてね、そしてまたこ

こは昔の集落だったのかな。墓の跡がいっぱいあつたんですよ。



平良章―仲間村だな。

新城―もともとは集落があった  
て廢村の跡があったんです  
か？

福地利供―何百年前かなあ。

平良章―明治三十年なんとかに  
無くなったと聞いている。

福地利供―とにかく鬱蒼たる  
ジャングルです。入ったら  
薄暗くなってるぐらいの、  
そんな感じ。とにかくター  
ザンに出てくるツルなんか  
が沢山あってね、皆さん分  
からんだらうけど、俺は中  
学生だったから分かる。

新城―福地さん初めて来た時の  
こと覚えてますか？

福地利供―覚えてる。ほとんど覚えてる、当時の事は。

新城―生活できると思いましたが？

福地利供―いや、生活できるのはあの頃は分らんさ。お父さんお母さん達  
がいるし、畑もないあいう状態で来たんだけど、私は中学の頃だから  
海外を夢見とったんですよ、大工だから。

山城まゆみ―先遣隊が先來てるから、小屋建てて家族を呼んでるから。

福地利供―こんな大きな土地見てびっくりしましたよ、とにかく。山原では  
段々畑でしょ。ここ来たら土地は広いし、中にジャングルもあったが、  
いや、原野も。大宜味から来た時にね。大陸みたいに見えたんですよ、  
のときの印象は。それでも、鳥だつて珍しい鳥が沢山おるし、カン  
ムリワシだつてこんな大きいから、初めて見たときはこんな大きい鳥も  
いるなあって。メジロなんかもカンカラに手で掴んで入れるくらい、こ  
うやつでも逃げないくらいの状態。自然もあったし、珍しいことが沢山  
あった。

平良章―あの当時から残ってる木があるんだよ、クバの木。

福地利供―謝名城の平良長康先生の屋敷だつた。

平良苗―章のおじさんなるさ。



石垣出発の前に友人に別れを告げる大宜味村の住民 1953年（沖縄県公文書館蔵）

河津―長康先生は帰られたんですよね？

福地利供―二人の屋敷あった、長康先生と、平良なんと言ったか…よしまさ。

山城吉輝―屋号スミヤグワ―。

福地利供―記念誌で屋敷も全部あるのかな、あるよね。とにかく来た当時は  
ただ一ヶ所だけ人が入れるようなところ大富があるところ、向こうから  
ちよつと入れるところがあるんですよ。

平良章―ハミガーな？

新城―皆さんどんな生活しました？何を作りました畑で？

平良さち子―イモ。

平良苗―小さい子はおんぶして、女は小さい木伐採するさ、男は大きい木。  
今みたいに機械じゃないから。

平良さち子―ツルハシでうっさーしー（それだけで）開拓してる。

山城吉輝―僕の時代まではね、イモ弁当持たされた。章も持ったかな？

平良苗―こつちに分教所があった。

大嶺茂子―あったの山のみ、ちようど丘なってる。

平良さち子―昔は学校の遠足といったらイモ皮むいて、塩ふつてチャラチャ  
ラーして弁当入れて、ただネギの葉つぼだけ入れたア ندا味噌、これが  
一番のご馳走だつたよ。山原でも。お父さんなんかの時代はこんなお菓  
子も何もないよ。イモとおつゆとあればこれだけでご馳走だつた。こつ  
ちでも孫なんかにも話したら、へえーと。所帯、子供なんかみ  
んなが移民して来るまでに、農耕する所に家主（長）なんかみんない  
毛作りしてらば先遣隊は。

福地利供―来た当初はジャングル伐採してイモ植えたり陸稲植えたり、これ  
食べてきたんだけど、作っている間にいろんな苦労があつたさーね。イ  
モ植えても何やつても猪との闘い、早魃との闘い、台風との闘い。それ  
の繰り返しでしたよ、ずっと。

平良苗―鼠も多いしな。

新城―土はどんなでした？山原よりいい？

平良苗―土は肥えておつたよ。

新城―色見たらちよつと茶色く薄い、赤土ではないですよ？

福地利供―これも今みんな掘り返してるからちよつと赤くなってるけど、あ  
の頃は黒い。



豊原（西表） 座談会

平成二十六年十月二十八日  
於…金城えつさん宅

参加者（※年齢は調査当時）

- ・金城 えつ（喜如嘉）八十二歳
- ・山城 スミ（大兼久）八十七歳
- ・金城 千代（喜如嘉）九十一歳

大宜味村史事務局

新城 河津



開拓之碑（1983年建立）



入植50周年記念碑（2003年建立）



金城えつ―私は二次移民で長男が生まれてからが移民にきたから。後から来ましたのでね。あんまり分からない。この方とうちの姉さんとは一次移民ですよ。

新城―分かるぶんどけお話ししてくれば。何も心配しないで、思い出話聞かせて下さい出来たら島クトウバで。役場から移民の皆さんの記録作るために来ました。村史編纂室の新城と言います。塩屋です。

金城千代―塩屋にはあれがおるな。饒波出身さ、もう定年なっているかいり仲村イサオ。あれもウロ―におったさーな、うちもウロ―だ。エツもな。

新城―息子は芸大出てから、三線で有名になってますよ。

金城千代―あせ、テレビに出る時もあるさ。

河津―河津です。謝名城です。

山城スミ―謝名城は喜如嘉から行ってグスクもあるよね？

金城千代―村長さんいらっしやったもん大富に。二、三か年前。一心会か何かあつていっばいねお祝いみたいにして。うちなんかこちから大富

に行つたさ。大宜味から団体でいらつしやつた。沢山だつたよ。

新城―お名前と年と出身字聞かせて下さい

金城千代―うちはよ、喜如嘉出身だけど、うち学校に行っている時はウロ―

だつた。結婚してウイカナグシクね。

新城―ウイカナグシクっていつたらどこなりますか？

山城スミ―今はよ、芭蕉植えられている。もうなくなっているさ。

金城千代―うちなんかこち来て六十一年だからね。イリヨシハマは分かる

でしょ。吉浜ハツさん去年亡くなったさーね。あれはうちの旦那の実家。

ハツの実家。うちの人とハツと兄弟。名前は金城千代。九十一歳なりました。もう四か月過ぎました。六月六日が誕生日でした。

新城―私六月七日、一日違いだね。お元気で。

金城千代―元気でない、何も出来ない。寝たり起きたり。

新城―こんだけ喋ればいいですよ。

金城千代―口だけ。忘れ物が多い。

山城スミ―私は大正十五年三月十五日生まれ。大兼久から喜如嘉に嫁に行つて二人子供出来てからここに、子供が小さい時に来た。

金城千代―うちも三名連れて来ましたよ。

新城―お元気ですね、みなさん。

金城千代―野菜いっばい作って売っているんだよ、これ（スミ）。

新城―今も？

金城千代―今よ、今。

山城スミ―家のすぐ側に、やがて一反歩近く、政府の人の（土地を）、高い

ときに買つてるところだーるわけよ。して、この本人も分からん。うんと荒らしているから、長男が、年に二回大掃除があるわけ。

新城―部落の？

山城スミ―部落の。そしてこの掃除して、そのまま荒らしていたのを、去年

おとしから、スパーが作つたら何でも買うから、頑張りなさいねー

というから。今もう雨が降らんから、朝六時頃から起きて、水溜めて撒

いて、エンサイとパパヤ、ネギ。売店ないからよ、大原スパーから品

物何々必要かーと毎日まわっているわけ、朝。

新城―いいね。こんなやって地元で採れて、また小遣いもあつたら、幸せだ。

山城スミ―一日ごしに。エンサイからあれこれ採るといったよ、ご飯食べる

## 星野 座談会

平成二十六年十月二十九日  
於…星野公民館

参加者（※年齢は調査当時）

- ・大城 森英（謝名城） 八十七歳
- ・大城 初枝（田嘉里） 八十四歳
- ・宮城 春（田嘉里） 九十一歳
- ・大嶺 苗（田嘉里） 八十七歳
- ・金城 政男（喜如嘉二世）
- ・平良 晴美（謝名城二世）

大宜味村史事務局

新城 河津



入植記念碑（1975年建立）



1977年に建て替えられた星野共同売店



大城森英―山原の大宜味村謝名城、大城森英、昭和二年二月二十七日、満八十七歳。

宮城春―山原の住所か？田嘉里やしが住所はな―わはらん。宮城春、大正十二年三月八日。今九十一歳、満でね。生まれ年は二―（子）さ。

大嶺苗―同じ田嘉里。昭和二年九月二十日、大嶺苗。

大城初枝―私は田嘉里、大城初枝、昭和四年三月二十八日。

新城―みんなでユンタクしながら、思い出したのをまたその都度話して下さいね。戦後しばらくしてから皆さんこちらに入って来られたと思うんですけど、その時の様子や、どういう経緯で来られたとかお話を聞けますか？

大城初枝―みんな引揚げ者で田嘉里には財産も何もありません。

大城森英―自給自足みたいな当時の生活ですから、大宜味では農業やつても飯が食えない、そういう状態。

新城―というのは、土地がない？

大城森英―土地もないしそういう事だから、移民の計画があったもんだから、これに申し込みして八重山に移民に来たと。大体のことは記念誌にあるから星野の場合は。ヤマモリさんほとんどあれが正確にきれいに作つてある。

新城―星野が一番早かったということですが、入った時はここはどんな状態でしたか？

大嶺苗―山。ジング山。

大城森英―ほとんどジャングルですよ。戦後マクラム道路といって伊原間の方まで道路作られておったんですけど、むるブルト―ザ―通しただけの道だったよ。それからですね、八重山移民でこっちに来た当時、うちの場合には生活の―畑耕すのに水牛が必要であるもんだから、この水牛買う為に金稼ぎに南方のマカオに行つたんですよ。それが向こうはマカオの共産軍であるもんだから、税関でもうすぐに捕まれたんですよ。

新城―マカオ？

大城森英―マカオで捕まれたよ、そのまま中国で一か年半ぐらい。これも記念誌に書かれてるでしょ。その当時は生活が厳しいから移民に来たという事です。だがまたこっちに来てしばらくしてから、東村のあんな土地改良して、こっちよりも喜ばしいぐらいの土地を持っているさ、うらやましいぐらいだったですよ。東村、そういう感じも受けたですよ。

新城―春さんはどんなでした？こっちに来た時に。

宮城春―来た時？もう山原で土地がなかったから。家作る土地もなかった



## 伊野田 座談会

平成二十六年十月二十九日  
於：伊野田公民館

参加者（※年齢は調査当時）

- ・山城 嵩信（田嘉里）八十五歳
- ・仲村 哲雄（田嘉里）八十歳
- ・金城 保夫（田嘉里）七十六歳
- ・金城 丈訓（田嘉里）七十五歳
- ・金城 由久（田嘉里二世・公民館長）

大宜味村史事務局  
新城 河津



拝所登り口の鳥居（1992年建立）



入植25周年記念碑（1976年建立）



河津—大宜味村役場村史編纂室から来た河津と申します。今日はいろいろお話を聞かせてください。

新城—新城と言います。二人とも村史編纂室という所の嘱託員で、新しい村史に載せていこうという事で、お話を皆さんから集めている所です。どうぞ宜しくお願いします。

河津—一人ずつ生年月日とお名前を教えてください。

山城嵩信—座ってやろうね。私はね山城嵩信。昭和五年九月二十一日。八十五なった。

仲村哲雄—昭和九年八月十四日。仲村哲雄。

金城保夫—金城保夫、昭和十三年三月二十七日。七十六歳。

金城丈訓—金城丈訓、昭和十五年十月七日。みんな田嘉里。

山城由久—嵩信の長男の山城由久です。

新城—じゃあ、こちらは先輩方は一世の皆さん？

仲村哲雄—そうですね。

新城—こっちに入ってから来た時の様子を聞かせてもらえますか？記念誌にも書いてると思うんですけど、皆さんそれぞれの体験を聞ければと思います。

山城嵩信—兄貴が来る前亡くなってよ、山原で。こっちに来る時は二十一。独り者。三十に結婚した。

新城—こっちでとうめした（見つけた）んですか？奥さんは？

山城嵩信—亡くなった。もう五、六年なるかな。今は長男（由久）と。

新城—何で大宜味からこっちに来たんですか？

山城嵩信—畑も沢山ないしね、八重山の方がいいということで兄貴が僕呼びに来たわけ。僕は戸籍上三男だが長男が早く戦死したからね、みんなが

二男と思ってるが、本当は三男なんですよ。

新城—二男兄さんもここに来たんですか？

山城嵩信—二男と一緒に。長男は戦死なんだから。

新城—山原での生活は厳しかった？

山城嵩信—まあ出来ておったんだが、こっちは土地が豊富にあるということ聞いてこっちに来たわけよ。

新城—どんなでした？土地いっぱいありました？

山城嵩信—あった。最初はジャングル。ジャングルの中を開拓して切り拓いてが今に至っている。

新城—鎌で？

山城嵩信—鎌で。あの時はねウンボーもないし、鎌。もう朝から晩まで。山

# 明石 座談会

平成二十六年十月二十九日  
於…明石公民館

参加者（※年齢は調査当時）

- ・真喜志徳正（大保）八十三歳
- ・吉川 憲光（塩屋二世）

大宜味村史事務局  
新城 河津



開拓碑に刻まれた先遣隊入植者の氏名



開拓の碑（1985年建立）



開拓の詩碑（2005年建立）



真喜志徳正―出身はテーフ、分かるだろうな役場だったら。二日前大宜味にいたよ。

新城―帰ってたんですか？

真喜志徳正―辺土名朝一のところ行つた。恵子ご存じかな？あれが私の甥っ子なんだよ、朝一が。遊びに娘なんかと、一昨日帰つて来た。三日間遊びに行つて。

新城―辺土名信二さんなんかエーカ（親戚）なりますね。

真喜志徳正―信二？あれはムーク兄さん。辺土名信二は私の姉、二番目の姉の旦那。

新城―じゃあ朝治さんなんかも。

真喜志徳正―饒波の、あれは朝一と兄弟だから、甥っ子になるわけさー。

新城―顔がどこかでお見かけしたような。

真喜志徳正―ザラにある顔だよ。

新城―大保のお顔ですよ、やつぱり。

真喜志徳正―大保では直接血のつながりは少ないな、もう。

新城―真喜志さんなんかもう一人なつてますけど、入つて来た時はここはどんな感じ？何で大保からこっちに行くという事になりましたか？

真喜志徳正―遊びに。本当。私な、先輩なんかがお前餞別じゃなくて帰りの船賃の足しにしないかと、私には農業する気がないということ先輩方が、信用がなくて。いつでも帰つて来いと、すぐ次の便で帰つて来いと、本当。真喜志コウギさんとかね、まだ元気かな？この間きかんかったな、

新城―まだ結婚しない時に来ましたか？

真喜志徳正―はい。奥さんその先に来ておつたからよ、大里に。私に下さ

いっていつてそのまま居座つた。

河津―ここに来て出会つたんですか？

真喜志徳正―うん、幼馴染み、親戚だよ。ハトコになるわけよね。

新城―奥さんもテーフンチュ（大保の人）？

真喜志徳正―テーフ。あれなんかの兄弟はいいな、真喜志康吉といつて、康雄、サダオとかね、ブラジルからぬーでいが（何ていうか）向こうから外国に開拓で行つて。

新城―ボリビア？

真喜志徳正―ボリビアかな、あれなんかイトコなるんだよ。こっちのおじー



久宇良 座談会

平成二十六年十月二十九日  
於…久宇良集落

参加者（※年齢は調査当時）

- ・宮城 茂正（塩屋） 七十一歳
- ・宮城 勝（塩屋） 七八歳
- ・宮城サエ子（塩屋）
- ・宮城 昌春（塩屋二世） 五三歳

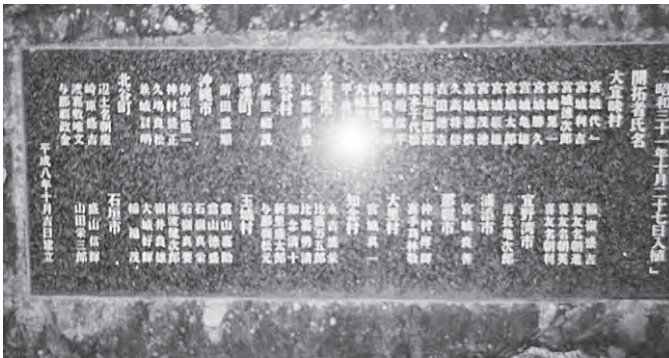
大宜味村史事務局  
新城 河津



開拓之碑（1996年建立）



入植記念碑（1956年建立）



開拓之碑に記された入植 53 世帯



河津—お名前教えてください。

宮城勝—宮城勝。昭和十年三月十二日、塩屋。

宮城昌春—長男、石垣生まれ、三十六年だから。宮城昌春、昭和三十六年七月二十五日。久宇良生まれ。

宮城茂正—俺は塩屋生まれ。宮城茂正、昭和十八年八月二十二日。

新城—終戦前に生まれてるんですね。

宮城茂正—でも戦争分かんよ。一つか二つの時どこか隠れていたんじゃないか、戦争全然分かん。

宮城勝—山に隠れてたはずな。

新城—サムニー（塩屋なまり）ですね。

河津—勝さんはいくつの時に久宇良に来たんですか？

宮城勝—二十三歳。

宮城勝—一年後に来ました、こっち移民の。何年度ないがやー。

宮城茂正—昭和三十三年じゃない。

宮城昌春—記念誌あるからあれを見れば。

河津—塩屋ではどんな生活してましたか？こっち来る前。

宮城勝—私はこっち来るまでは北谷の軍部隊で働いていたわけ。あつちで働いているのこっちに結婚して来たわけ。

河津—塩屋で結婚して久宇良に来たんですね。

宮城勝—はい。

河津—旦那さんと一緒に入植して来たんですか？

宮城勝—いや、こっちは一年先に。同じ塩屋の人さーね、一年先に来てるわけ。私は一年後に嫁いで来たわけ。

河津—先に旦那さんは行って、こっち来る時は一人？子供はまだいなかった？

宮城勝—いなかった。

新城—子供さんは昌春さんの他には。

宮城勝—こっち来て一年後に生まれた、三十三年生まれと三十六年、三十八年、四十年、四十二年。

宮城昌春—入植は三十一年十月二十七日だね。

新城—こっちに来られてから、子供さんも次々生まれて、子供もまだ小さいけど、面倒みながら畑やっただけですか。

宮城勝—あの頃は、私はおばーがいたから、おばーに預けてから畑行ったり、



大里 座談会

平成二十六年十月三十日  
於…大里公民館

参加者（※年齢は調査当時）

- ・山川 ヨシ（喜如嘉）九十歳
- ・真喜志フサ子（大保）八十九歳
- ・真喜志篤之（大保）七十八歳
- ・真喜志茂夫（大保）七十八歳
- ・野里 節子（謝名城）
- ・平良 幸範（大保）

大宜味村史事務局  
新城 河津



開拓之碑（1983年建立）



真喜志篤之「おばーたーは僕なんかがお芋も何も作って、その後にもまた連れて来たわけさ。開拓移民というのがね、自分なんか先発隊で来てる。

新城「まだお若いですけど。

真喜志篤之「十七歳の時に来た。

新城「お名前と生年月日教えてください。

真喜志篤之「真喜志篤之。役所行ってもどこ行ってもトクユキと呼ばれる。

アツユキと呼ぶ人はいない。

真喜志フサ子「うちの主人と兄弟。同じ家さ、家族。

河津「生年月日は？

真喜志篤之「昭和十一年十月六日。本当は生まれは十年だけどね、届け

がわざと一か年ずつ遅らしている兄さんからみんな。だから結局は学校

は一か年遅れて。学校まで連れていかれたのよお母さんに。お母さん無

学で、まあ自分のお母さん無学と言うのはちよつとあれだけどね。分か

らんから、どこの誰なんかと同じ生まれ同じ学校に行くということで学

校まで連れて行かれて、そして受付してる時に、「真喜志君は来年から

が出られる」といって帰されたの覚えてる。今日一緒に来るべき人がま

だ来てないんだけど。僕と一緒に先発隊で来た人が。もう何名かは亡く

なつてね六十何年もなるからさ。その人達はみんなちよつとバンジ三十

代ぐらいで来てるから、僕なんか若かったから、今でも生きてる。

河津「出身は？

真喜志篤之「大保。

新城「昨日、明石で大保出身の方と会いました。

真喜志篤之「会ったでしょ、徳正兄さんね。あま（向こうは）イトコ、マタ

イトコぐらいなる？

真喜志フサ子「マタイトコかな。

真喜志篤之「こつち（フサ子）がほとんどこういった関係は分かる。自分な

んかには分からないですよね。だから、ユタ（巫女）しても大丈夫ぐ

らいの、いろんなこと分かってるよ。

真喜志フサ子「九十なつたら何も忘れるよ。

新城「入ってこられた当時の先遣隊でいらしたんだつたら、いろんなお話が

あるんじゃないですか？大変だったんじゃないですか？

真喜志篤之「あの頃は一〇〇トン未満の船だったからね、それでも大保とい

う所はアギ島、アギ島っていつて分かる？あんたはどこ？

新城「塩屋です。

## 琉球王府時代の移民

### —寄百姓の悲劇に追い打ちをかけた明和の大津波

戦後の開拓を行う際に、散乱していた昔の入植者たちの野晒しの遺骨を集め手あつく祀っているという話をよく耳にした。戦後移民を語るとき、どうしても触れておかなければならないのが琉球王府時代の移民である。

琉球王府時代の移民は主として石垣、西表島を取り巻く小さな島々から強制移住させられた「寄人、寄百姓」と呼ばれた人々で、当時は「島分け」ともいった。寄百姓を分村するときは、役人は目をつぶって部落の道路を境界線として、どちらか一方を移民組として移住させ、帰村や住居の自由は絶対に許されなかった。今もなお、この分村の痕跡が「道切り」として伝えられ、寄百姓の悲劇は民謡、民話の中にも多く残されている。沖縄本島や宮古から船で八重山に入ると、なだらかな茂登連山の中で、山頂の尖った野底マーペーが最初に目につく。この野底マーペーには島の人々が語り継いできた強制移住の秘話があり、黒島の「チンダラ節」にもマーペー物語がうたわれ、昔の強制移住のシンボルとなっている。

蔡温の行政手腕については今でも評価が高いが、八重山の多くの人は、強制移住の失敗から蔡温については厳しい評価をしている。一九六七年発行の『八重山開拓記念誌』（八重山支庁）によると、蔡温が八重山移住に着手した目的を、年貢米の完納、外国船の監視、過剰人口の調整、柚山の造林保護育成、諸役人の部落巡視上の便宜等とし、一七一二（正徳元）年から一七五二（宝暦二）年の四二年間に移住政策を進めた。

悪名高い人头税は八重山、宮古では一六三七（寛永一四）年から賦課されるようになったといわれているが、強制移住で出来た新村は、そのほとんどが山に接しており、当時の人々の苦しみは想像に絶するものがあった。笹森儀助の『南島探検』（一八九三年）によれば、その原野は台帳上数百町歩余りとなっているにもかかわらず、「丘間は凸凹甚だしく耕作に適せず」としている。

八重山の人口の推移を、牧野清著『新八重山歴史』（一九七二年）で見ると、人头税の布かれる前の一六〇七（慶長一三）年は五五〇〇人、強制移住前の一七〇六（宝永三）年は九八九七人、強制移住後の一七五三（宝暦三）年には二万六二八五人となっており、人口は急速な伸びを示している。

そして一七七一（明和八）年には一万九六七九人と急減を示す。これは明和の大津波によって人口が急激に落ち込んだためである。

花山孫位著『明和八年八重山大津波記』（一九六四年）によると、大津波前の八重山の総人口は二万八八八一人で、大津波による死亡者は九三一人にも上った。それから八重山の人口は年々下降線を描き、そのため寄百姓が一層頻繁に行われ廃村寸前の村の再建が図られた。

この大津波による被害は、石垣島の寄百姓を行なったほとんどの村にまたがり、中でも最も悲惨な村は、桃里村付属の仲与銘村である。この小村は一七六八年に白保より寄百姓して現在の伊野田付近に村建てした村で、人口二八二人全員が大津波にのまれ、村は跡形もなく消失したという。一七一三年に波照間島から寄百姓を行なった白保村は、人口一五四六人のうち生き残ったのは僅か二八人だった。その後再び波照間島から男一九三人、女二五人を人配りして村が再建された。一七五三年に寄百姓で村建てした安良村も、人口四八二人のうち生き残ったのは男女二十一人で、この村も隣村の平久保から男二五人、女二人を強制移住させ村の再建に当らせた。こうして大津波の被害地域に離島から寄百姓を行なったのは合計二一六一人に上ったものの、その後、マラリアの蔓延などによる厳しい

歴史を歩み、廃村となった集落も多い。



イファンガニ（伊波の鐘）

イファンガニは赤鉄鉱や褐鉄鉱を含み、直径約7.5メートル、高さは約2.4メートルあり、この石をたたくと雨が降るといふ伝承がある。また、明和の大津波を記した『大波之時各村之形行書』という史料には、「一、安良村より北方の伊波泊という所に二間角ほどの石がある。ただし、この石は安良カ力ネと呼ばれ、元々同所の浜にあったものだが、津浪によって30間余り（約55メートル）北方に引き流された。」と記され、平成24年11月に「石垣島東海岸の津波石群」の一つとして国の天然記念物（地質・鉱物）に指定されている。





江洲 座談会

平成二十七年九月十六日  
於…上地安昭さん宅

参加者

- ・上地 安昭 (大保)
- ・上地 里子 (東村)
- ・下地かずえ (塩屋)
- ・比嘉 キク (塩屋)

大宜味村史事務局  
上地 河津



入植40周年記念で建立した開拓の碑 (2006年建立)



下地かずえ—安昭さんに聞けば一番いいさ。私は四十四年になるかなこつちに来てから。昭和四十八年に来た。私は父ちゃん(旦那)が教員辞めて焼き物やるといつて来たのよ。

比嘉キク—私は五十三年。

上地里子—一次が九名ですね。村史にあるでしょ？

上地安昭—最初に来たのが九名。それから十五名まで一次で。宮里金次郎村長の時だから、まだ資料残ってないかな？一九五九年四月に来てるから。

上地里子—今でこうやっておかないと、もう分からなくなるよ。

上地安昭—もう分からなくてもいいよ。

下地かずえ—部落はいつまでも残るんだのに、子供達に伝えないとね

上地安昭—合衆国だから、今からの子供達は反応はないよ。

下地かずえ—ここに住んで、苦労したという証拠は残さないといけないさーね。

上地里子—苦労したといったらね、今の子供達は「フリンムンがやってる、馬鹿だったんじゃない」って。馬鹿じゃないよ生きるためにやったんだよって。

下地かずえ—生きるために来るんであって、みんな。

上地里子—車もないでね。生徒も可哀相に。話したら今日で終わらないぐ

らいよ。

下地かずえ—ここ開拓地で八重山も開拓地でしょう、八重山に行くよりこつ

ち移った人が得であるわけ。

上地里子—最後の開拓地。

下地かずえ—八重山はヤキー(マラリヤ)かかって亡くなった人がいっぱい

いてまた戻ってくるけど。八重山よりはここで開拓行ったほうがいいね

と思っただけさ。

上地—こつちではマラリヤは？

下地かずえ—そんなのはいさ。みんな八重山でヤキーの薬まいたつてじゃ

ない？アメリカが。

上地安昭—八重山は石コロコロでしょ、可哀相に。台風も多いし。

上地里子—宜野湾の伊佐浜というところに部落があったのよ。こつち軍用地

が取ったから、この人だちをこつちに移転させるために。だけど町から

来ないでしょう山原には。だから全島から募集したら大保、国頭、読谷

からと合衆国なつたわけ。

河津—近くの人から募集というわけではなかったんですね。



沖繩の郷土月刊誌『青い海』（一九七九年十一月号 八七）「特集 語り継ぐ大宜味女の昭和史開拓地に生きる 二女性が語る江洲の開拓生活」より、取材記事を抜粋

### 平良ヒデさん（五一才）

名護から北上し、塩屋湾にさしかかる手前約百メートルの所から、東側の山手へのびる舗装路がある。山間をぬって走るその道を、車で約一五分のぼりつめると、視界に一面、赤茶けた広大な耕地がひらける。そこが、県内でも特異な農業開拓移住地・江洲部落だ。

記者は、戦後の厳しい状況の中でその開拓を陰になり、日なたになって支えてきた女性に焦点をあてることによって、江洲の開拓史の一端をひもとこうと試みた。現在、江洲には三戸の農家がある。それぞれに入植の年代も異なり、その背負ってきた苦勞にも他と比較できないものがある。そういう中から、今回の取材では、平良ヒデさんと新里トキさんにご協力いただき、開拓生活にまつわる苦勞を語ってもらった。

八月二八日、快晴。記者はまず、この地で農業に従事しながら「開拓の花」など労働歌をつくっておられるという平良ヒデさんを訪ねた。

江洲には今、果樹園芸に主力を注いでいる農家が三〜四軒あるが、ヒデさんの家もその一つだ。ご主人の新正さんは一九六一年三月から入植したが、ヒデさんがここで生活するようになったのはそれから四年後の六五年からである。それでも

「開拓という新しい土地に希望を求めて出発したんですが、開拓とは名ばかりで、来る日も来る日も子どもをおぶって山稼ぎの連続でした。昼は原木を切り出し、夜は庭で薪に束ねて、その日その日の生活費を稼ぐのに精一杯だったんです。

もとはといえば、この江洲開拓計画は、戦後全島をせっけんした軍用地接収によって土地を奪われた農民へのその肩がわりとしての色彩が強かった。八重山や南米などへの移民がさかんに奨励され、特に大宜味や国頭村から海外で出向くものも多かった。ヒデさんのご主人はじめはポリビアに行く予定だったといい、彼女のひとまわり下の世代でポリビアに行つて失敗して帰ってきた人も多い。

「今から考えると、私どもは運がよかったといえるかも知れません。でもあの当時はほんとに赤貧のどん底で、よくここのまでやってきたなあ、と自分でも不思議なくらいです。主人は他の人どちがつて、パインのあい中に果樹を育てるという方法をとったりして頑張っていたんです。でも、果樹栽培は苗木、肥料など資金をつぎこむ一方で、収穫までは長い月日がかかるんですね。それでも家計を預かる主婦としては生計はたてていかなきゃあならないわけだからよくケンカもしました。」



庭先に立つヒデさん（「青い海」）

### 再生の意気に燃えて

ヒデさんは前のご主人を若くして亡くし、悲しみにうちひしがれ、悶々とする中で、ある日、ふと手にした雑誌の「人間には仕事のないものほど不幸なことはない」という文句に心をうたれ、心機一転、生きる意志を強く固めたという。

「そういう再生の意気に燃えて今の主人と結婚して、この地にきたら、それまで二三年間もできずにいた子どもが二人も生まれたんです。入植当初とても苦しかったんですが、手ばなしで喜びました。子どもは自分の宝です。子どもを立派に育ててゆくということからすると、私どもの苦勞も苦勞のうちには入りませんよ。」

その子たちも、今はスクスク育つて中学二年と小学四年生だ。「何しろ山の中の生活なので、いろんな不自由があつて、育児の面でよく里の親から注意もされました。おやつもなかったんで、キビのからをおやつがわりにしたり、学校も遠いうえに道も悪く、靴はいたむしで、学校では江洲の子どもたちはすぐわかるというくらい、ねばり強い赤土だったんです。」

江洲から津波小中学校まで約四キロ。徒歩にして約一時間かかる。五年ほど前から、ヒデさんの家の近くの丘に鐘をとりつけ、毎朝六時四〇分には子どもたちの登校をうながす鐘が鳴る。それがヒデさんのご主人の日課になっている。

### 歌を支えに

へ金はなくても幸せだ

広い大地に踏んばれば

くじけぬ勇気が湧いてくる サアー

頑張れ、みんなの開拓でーむぬ

ヒデさんが作つた「開拓の花」の一節である。これまでも「入植数え歌」や「教育隣組の歌」などをつくってきた。

「ただ楽しみでやっているだけではないものじゃないですよ」と笑うが、部落の結束をうながすユニークな存在になっている。

現在、ヒデさんの家は六〇〇坪の果樹園をもっている。三〜四年前までは、台風前の五〜六月には収穫できるという利点を生かしてスモモを中心に栽培してきたが、最近ではビワにその主力を注ぎつつある。

「ビワは実がなると、ビニール袋でおおうんですが、夜になるとコーモリが飛んできて、ビニールの上から果汁を吸うんです。だから、木全体に網をかけなければなりません。二月からは、毎晩おそくまで主人の網のつくる作業にかかりつきりです。」

ご主人へのいたわりをこめて、ヒデさんは、そう語った。



部落の中心にある共同売店（「青い海」）

## 第二節 県内の郷友会活動

### 心のよりどころ郷友会

郷友会とは、故郷を同じくする者同士が、共同体的結合関係の下で親睦や相互扶助のために集い連体感を共有し活動している集団である。その基盤は故郷を一にする者の共通の生活体験だと思われるが、本土の人達ではそれが移住先で共同体意識にまで高まることはほとんどない。

海外では明治末期から昭和五〇年代頃にかけて、主に国策として行われた集団移民で、苦業を共にした人々の間で日本人会・県人会・村人会等が組織され、異郷の地で頼ることのできる郷友会の存在は、どんなに大きなものであったか想像に難くない。その活動は、ウチナンチュ・イギミンチュとしての自らのアイデンティティーの確認、二世三世ではアイデンティティーの形成・確立に少なからず影響を与えていると推測できる。

しかし、現地で生まれ、その国の言葉や習慣の中で育った二世、三世以降の人達と、沖縄に対する愛着・理解を共有することには無理があり、様々な機会を通してウチナンチュ・イギミンチュとしてのアイデンティティーを育もうと奮闘する先達の努力は、次第に困難の度合いが増していることは否めない。

山が海岸近くまで迫り耕地の少ない大宜味村では、村を出て県内・県外あるいは国外に根を下ろし発展してきた人々が数多くおられる。そのような人々は、言語や気候風土、生活習慣が違う未知の場所で根をはり踏んばる心のよりどころとして、故郷とのつながりを強く求め、自然発生的にその地域の同郷人が集まり郷友会を結成した。

大宜味村を母体とする郷友会は「一心会」と名づけられ、大宜味(村)一心会の傘の下、ほぼ全ての区に郷友会が結成され、名称は「一心会」の上に国・地域・区名等をつけて、例えば「塩屋一心会」などと称することが多い(喜如嘉は「七滝会」)。なお、昭和三七(一九六二)年に行政区として誕生した江洲については、諸々の事情から郷友会の結成を見ていない。

それら全ての郷友会について、実態を詳らかにすることはできないが、『月刊青い海一一八号 一九八二年二月』に大宜味一心会誕生の経緯が述べられている。それによると「那覇を中心とする郷友会の組織化はそのほとんどが第二次世界大戦後故郷から那覇ないしはその周辺への大量の労働力移動と深く関連して行われている。それゆえ、郷友会という名称での組織化も、

アメリカ軍の沖縄占領に伴う軍雇用がピークに達した昭和二〇年代の後半から始まり、日本の高度経済成長政策によって沖縄からの労働力の調達を本格化させた昭和三〇年代の後半までの時期に集中している。そのような意味では、郷友会の組織化自体は第二次大戦後の資本主義の発展と深く絡み合っている。――中略――「郷友の心は一つ」ということで名づけられたという大宜味一心会は、すでに大正五年郷里から那覇へ出てくる者のためや、大宜味村から海外へ移住する人々の便宜等のためにつくられている。」とあり、県内でも早い時期から一心会のつながりの中で、都市部へ出てきた人への住居や仕事の斡旋、事業費や学費の融資、慶弔の支援など、助け合いともに発展してきた歴史がある。

その頃に比べると現在は交通の便もよくなり「故郷は遠くにありて思うもの」というフレーズも時代にそぐわない印象を受ける。また、会員の高齢化や二世、三世の関心の低さ等から組織としての活動を休止している区もあるが、区の伝統行事には郷友会がなくてはならない存在となっており、母区からも総会、新年会、忘年会、生年祝いに駆け付けるなど、年間を通しての交流は現在も脈々と続いており、毎年行われる大宜味一心会大運動会は平成二八年に五〇回を数えた。八重山一心会も毎年一堂に会し敬老会や大運動会などを開催、大宜味村から村長や区長及び有志が参加し旧交を温める機会となっている。





# 第四章

## 各字に見る

### 移民・出稼ぎ





## 第一節 各字に見る移民

### 社会的背景

封建的束縛の強かった時代には、自分の生活の場を自由に変えるわけにもいかず、生まれ落ちた場で死ぬまで生活するのが普通であった。あてがわれた猫額大の土地を耕作し、諸上納を納め、自分等の食料は山の中に開墾した「あらじ」で賄っていた。

置県後、年を追って諸規制が解かれていく中で、生活のやり方が、徐々にではあるが変わっていった。自給自足を旨とした現物中心の生活であったのが、貨幣の流通により生計に占める貨幣の利用頻度が増加した。否、貨幣なしには生活のできない世の中へと移り変わった大宜味の人々は、生活に欠かせなくなった金を得る源を山林に求めた。

『大宜味村史資料編』所収の、明治三十一年四月一日『琉球新報』（四九三ページ）の記事をみると、当時の生活がいかに山林に依存していたかがわかる。

明治三十年頃の大宜味の年間移出金額は、四五二六円でそのうち山林関係移出品の額は三一七〇円余となっており、全体の七〇パーセントを占めていることになる。中でも、割薪は三五六四円余の額に上り、全移出額の五〇パーセント余に達している。老若男女何れを問わず薪を出すことが容易であったためであろう。

移入総額は四二一四円で、うち焼酎が二六五四円を示し、薪代を全部焼酎にすぎ込んでもなお不足するという状態であった。

焼酎購入のために薪を出しているという状況が大宜味の有様であった。同書所収の津口手形（二三六ページ）をみると、大宜味の船主の船には決まって焼酎壺が積み込まれている。酒の消費量は後々まで多く、大正の頃には禁酒運動が起ることになる。

沖縄県統計書に明治三十一年の「工芸人」統計が収録されている。次の職種について各間切毎の職工数を記入している。即ち、鍛冶職、桶職、木挽職、大工、石工、左官、染物職、和服仕立職、洋服仕立職、経師職（※表具飾）、船大工、豊刺、たばこ、綿打職、角細工職（※動物の角に細工をする職人）、指物職の十六職種のうち、大宜味にその職人がいたのは、鍛冶職の八戸（八名）と船大工の十七戸（十七名）だけであった。後々大宜味大工の名で知られるようになる大工は、その頃いかなかったことになる。工芸人の統計数字からも推測できるように、大宜味の人々にとって金を

得る途は非常に限られていたことになる。

山林の産物以外に収入の当てのない人々にとって、機会さえあれば村を離れて他所で働くということが当然のことのように受け止められたものと思う。

### 移民

沖縄から最初の移民が送り出されたのは、明治三十二年のことであった。それはハワイへの移民で、金武の人、当山久三氏の企画によるのもであった。大宜味からの移民が何年ごろから始まったか、確かな資料を持ち合わせていないが、明治三十七年のフィリピンへの移民が国頭郡から多数出ているので、その頃からではないかと思う。明治四十年にカナダへ一五二名の移民が送り出されているが、その中には大宜味出身の人々も交じっていた。根路銘出身の宮城倉太もその一人であった。沖縄からの移民が始まると、間もなく大宜味の人々もそれに加わったことになる。

明治四十一年の時点における移民数とその送金額の表が『沖縄縣史7 移民』（一九七四年）に収録されており、大宜味の数字を拾い出してみた。

ハワイ	一二名	八二三元
アメリカ合衆国	一〇名	二八〇円
マニラ（フィリピン）	一〇名	〇
メキシコ	五〇名	四、八五六円
ペルー	一六名	八四円
カナダ	四九名	九五円
ブラジル	三名	〇
計	一五〇名	六、一三八円

当時はカナダ、メキシコへの移民が多かったことになる。募集の条件などによって移民先の選択も変わったものと思う。行先地は大して問題でなく、外地で稼げる場所であれば、どこでもよかったのではなからうか。話によると、明治四十年にカナダに移民した人々の多くは、当初はハワイへの移民を希望していたが、それが叶えられなくなり、急遽カナダへと行先地を変更したということである。

外地からの送金に目をみはり、移民がえりの人々の話に共鳴し、一獲千金を夢見て海外に出る人が年々増えたものと思う。

海外に出るには多額の旅費が入用であった。働く場を海外に求めたくても、旅費の工面のできない人々は、移民として村を離れるわけにはいかな

大嶺神次郎 (泉屋)	明治製糖
大城喜亮 (前口)	嘉南大圳
大城岩雄 (勢理屋小)	東石郡役所
稲福清彦 (高根小)	明治製糖
大城親正 (東り)	嘉南大圳 昭和一二年朝鮮へ
宮城倉顕 (倉根小)	大日本精糖
高江洲重行 (仲門小)	明治製糖
大嶺朝宥 (泉屋)	嘉南大圳
大城信二 (後東り)	〃
大嶺朝憲 (泉屋)	台南州庁
高雄州	
大城信吉 (後東り)	日本アルミ工業
南洋諸島	
宮城新一 (新地)	大正一三年 商業、林業
宮城新二 (〃)	漁業
宮城新喜 (〃)	〃
宮里徳五郎 (玉井)	〃
大城満五郎 (東り小)	商業、県人会長
大城経一 (川端小)	大工
古波蔵堯徳 (辺土名)	〃
平良作之助 (徳門小)	南洋興発会社
平良源福 (前玉井小)	『根路銘誌』(一九八五年)

### 根路銘が生んだ世界の牡蠣王 宮城新昌



明治一七(一八八四)年五月四日根路銘に生まれる。明治三八(一九〇五)年国頭農学校を卒業、翌年海外雄飛を志し、一移民としてハワイへ渡航したが、三ヶ月後、邦人の北米渡航最後の船でシアトル上陸。アラスカ沿岸の水産業隆盛を目の当たりにしてその道の研究を志す。オリンピヤ牡蠣会社に入社し、

三年間牡蠣養殖の実務を身に着けカナダのバンクーバーにおいて養蠣業を創始。二年後、ロイヤル・フィッシュ・コンパニーを買収し牡蠣養殖の傍ら水産会社を経営。稲福善太郎、比嘉良重、当山正良氏など何れも当時の従業員であった。

大正二(一九一三)年帰国。大正四(一九一五)年、資本金五〇万円の北洋水産株式会社を創立して樺太カムチャッカから海外への水産物輸出に乗り出した。根路銘からも大城信重、平良源五郎などが一線で指揮を執る新昌氏を支えた。大正一三(一九一四)年、世界に誇る一大発明となる垂下式養殖法を開発。新昌氏の指導啓発により日本及び世界の養蠣事業は飛躍的に進展し、その恩恵は計り知れない。

その功績により、昭和五四(一九七九)年九月一七日、宮城県石巻市荻浜に『宮城氏一族顕彰碑』が建立された。大宜味村では、塩屋湾を見晴らせる屋古海岸に『宮城新昌翁頌徳碑』と『栽培漁業開拓湾の碑』が建立(平成二一年)された。なお、石巻市の顕彰碑は平成二三年の東日本大震災により破壊・流出したが、大宜味村が再建運動を主導し、平成二五年に再建が実現している。

いなかっただけ、那覇からの疎開人達もいっぱい入っていました。来た直後は食糧がなくて、南洋から持って来た十三、二十五のトウシビー祝いに着るきれいな晴れ着を、田嘉里にイモと替えに行きましたよ。戦争中、ホーチ（幸地）の方に爆弾が落ちたという話は聞いていますが、家はほとんど残っていました。私はパラオで女学校二年行っていたから、辺土名高校の二年に編入しました。その当時は女子は喜如嘉で、男の学校は火葬場の近くにありました。

パラオには、沖繩に帰って来てから二回ぐらい行きました。行くたんびに変わっていましたよ。だけど自分たちが畑していた所、もう草ボーボーになっていましたけど……自分達の土地はわかりますよ。遺族会の墓参団でも一回行きました。あの頃、学校の先生はヤマトウーですよ。向うこではシマクトウバでは話しなかつたです。今でも行きたいと思えますよ。やっぱり、自分は向こうで生まれたから……。

『新大宜味村史戦争証言集 渡し番』（平成二六年）

## 第二節 各字に見る出稼ぎ

次の表は、昭和十年十二月末における大宜味村出身の県外在住者調（『沖繩県史』7・所収）である。昭和十年には一、二、三一名の大宜味出身者が県外に在住していたことになる。大阪・兵庫に七、三二名がおり、大半の人々が出稼ぎとして故郷を後にしてきた人々であつたと思う。

都道府県名	男	女	計
東京	65	33	98
京都	1	0	1
大阪	230	215	445
奈良	22	31	53
兵庫	143	143	286
長崎	8	6	14
群馬	0	4	4
茨城	1	0	1
奈良	0	4	4
三重	2	9	11
愛知	0	1	1
静岡	0	1	1
岩手	1	0	1
島根	0	15	15
岡山	0	62	62
山口	0	109	109
和歌山	0	10	10
徳島	7	6	13
香川	0	11	11
愛媛	0	2	2
福岡	36	16	52
佐賀	1	0	1
熊本	4	1	5
鹿児島	13	18	31
計	534	697	1,231

県外出稼ぎについて、安仁屋政昭氏は、「移民と出稼ぎ」（『近代沖繩の歴史と民衆』）の中で、「……出稼ぎの大多数が短期出稼ぎ型の若年工場労働者である……。これらの出稼ぎは第一次大戦で急激に増大しているが、中でも、紡績女工としての女子労働者の占める割合は年々増大している。女子若年労働者の約八〇パーセントが紡績女工といわれ、男子は人夫あるいは土工その他の職工というのが一般的であつた。」と述べている。

女子労働者の八〇パーセントが紡績女工であつたという指摘のもとに、表を今一度見ると、大阪、兵庫、岡山などの紡績業の盛んな府県に女子労働者が集中していることを発見する。大正の半ば頃から昭和十四、五年頃まで、大宜味村からも、学校をおえた若い女性が、女工斡旋人の勧誘のもとに送り出された。送り出し先は、紡績業の盛んである関西方面であつたことを表はしている。

種別	男	女	計
田里	28	39	67
謝名城	35	40	75
喜如嘉	110	155	265
喜饒	37	29	66
大兼	30	30	60
根宜	8	7	15
上路	59	39	98
塩原	26	17	43
押屋	292	315	607
屋川	10	31	41
田古	18	16	34
大港	27	20	47
野喜	23	24	47
宮屋	30	18	48
津城	33	37	70
波	(79)	(71)	150
	129	121	
計	(845)	(888)	1,733
	895	938	

注 津波の数字に疑問がある。( )内の数字は計に合わせるために推量で書きこんでおいた。

昭和十年の時に比べ、十六年には五百名程の増加を示している。どの字からも出稼ぎのために県外に出ているが、大宜味だけは他字に比し少ない、何か理由があるのだろうか。

若年女性の出稼ぎは、経済的なことも大いに影響したであろうが、一種の流行的なものもあつたのではないかと語る人もいる。現在六十六、七歳になるある婦人は、「女学校に進学した人以外は友達みんな紡績に行つたよ」と語っていた。

饒波のある古老は、家普請の際の賄は、紡績に行っている妹たちからの送金で充て、ひじょうに助かりました、と語っていた。第一次大戦後は、農家



## 村外、県外、果ては世界に目を向けた根路銘人

### 一、大宜味大工のはしり

明治三五年頃は優れた大工が相当居られたようである。明治三六年五月二七日琉球新報に、大宜味校新築校舎の請負入札の広告が出ている。

#### 工事請負入札広告

大宜味尋常高等小学校校舎坪数貳百九拾六坪参合八夕六才。此入札保証金、各自請負見積金額ノ百分ノ五、此契約保証金、請負金額ノ百分ノ拾。入札者ハ二ヶ年以上請負業ニ従事セル者ニ限ル。右入札希望ノ者ハ当役場ニ就キ工事請負規則契約書御熟覽ノ上、本年六月五日正午十二時迄ニ営業証明書並ニ保証金相添ヘ当役場ヘ入札スベシ即時開札ス。

明治三六年五月二十三日 大宜味村役場

この建築請負は宮城文良さんが落札し根路銘大工の手により落成した。当時間切から入札参加請負者が根路銘だけであったことは、根路銘に優秀な大工がおり、大工の本場であったと考えられる。

大宜味校新築工事について、宮城信三郎さんが当時の校長親泊朝擢氏より直接承った話によれば、『大宜味校の新築工事は公入札で村内からは根路銘の宮城文良さん、村外からは首里の大工が入札に応じました。開札しますと、二九六坪参合八夕六才の工事を宮城文良さんは九五〇円で、首里の大工は二五〇〇円の入札で、宮城文良さんが落札しました。間切当局もびっくりしましたが、首里大工は「九坪大工にそんな大きな工事ができるものか、どうせ最後まで仕上げることが出来ず途中で投げ出すだろう」と塩屋に滞在してその進行状況を見守っていました。予定通り上棟式を済ませたのでびっくりして首里に帰って行きました。その工事が着工されると当時役場で土地整理事務に携わっていた新里文保さんは絶えず大工を励まされ、校区民の出賦を督励し間切当局学校長と連絡を取り、大工同様苦勞されましたので、落成式の際は感謝状と金一封を贈呈しその功績が表彰されました。大宜味校の校舎建築のことが県下に知れ渡ると、一躍大宜味大工の名声信望が県下で評判になり根路銘大工の請負工事が多くなりました。』この親泊先生の話を通してわかるように、当時の根路銘大工の技術は相当高く、自信と信念と団結心の強さを伺い知ることが出来る。

その工事は宮城文良さんを請負者に、金城健士さんが棟梁で浜元源信さんをはじめ根路銘の大工が一丸となって協力し見事に工事を完成することが出来ました。校舎建築の資材は脇地やミーファジ辺りから伐り出されたもので、

木材の伐り出し、運搬、地均し等校区住民の出賦人数は一五二二人かかった。資材は大きな杉材で、奉安室はほとんど檜材、扉は樺の一枚戸で出来ていた。その残材で根路銘の村屋と民家二軒が建てられた。

宮里安定さんは明治三五年から名護を中心に大工業を営み、明治三七年大宜味大工として初めて那覇に出て請負業をなされた。屋良小学校、豊見城小学校、真壁小学校を初め多くの学校や役場、民家の請負をなされた。大正元年には塩屋小学校の請負をなされ、長嶺小学校の請負後土木業に転じられた。

大正になって大宜味大工の名が県下に高くなったが、先鞭をつけたのは宮里安定さんであった。即ち大宜味大工の草分けは根路銘大工である。大正一〇年頃、饒波の前田朝一さんが那覇で名声をあげたが、前田朝一さんも宮里安定さんが伊江小学校請負の時の一棟梁で、小学校落成後独立したものである。

明治三六年八月一九日の琉球新報に『大宜味の物産は教員と大工とはよく言うことだが、成程そうだ。現に教諭一、訓導九、準訓導一四、代用教員一、計二五人で、月々の収入二五二円。第二の物産は大工、間切内三四五名も居るが他の地方へ出稼ぎして随分金がとれるようだ。就中(なかんずく)人口の割に大工の多いのは饒波と根路銘の二ヶ村で、学校生徒でない青年は殆ど大工である』

明治四三年一月二八日沖繩毎日新聞親泊先生の回顧の記『大宜味大工の名最も現れ、国頭郡は更なり、島尻は知念玉城までも出稼ぎ、那覇に居住する者多い。これも彼らが真面目で勞を厭わぬからである。村外に遠征する者八百人以上の多きにのぼるから請負業者もその援助に依らなければ手も附けられなそうな、近頃流行る組立のくり舟も早くその術を会得して盛んに造っている』

宮里安定さん以外にも技術に優れた棟梁級が多く国頭郡内各町村、伊是名、伊平屋、久米島、宮古、八重山の民家や学校、役場、製糖場などの請負をされた。大正十二年関東大震災後の復興工事には大城清光、大城喜三郎、友寄友一、吉浜嘉太郎その他多くの若者が京浜へ出稼ぎ大工として出かけた。次に大城秀二さんが調査した根路銘の大工の状況を記載します。

### 大城秀二さんの調査記録

戦前の根路銘部落の経済の大半は大工、土木従事者の仕送り潤った。大宜味大工の本甚は根路銘である。県下に大宜味大工の名を響かしたのは大半



## 第五章 ―

# 移民・出稼ぎ関係資料

布哇移民の応募者

明32・12・3 琉新

一昨一日那覇区役所に於て、謝花属、山下島尻郡書記、斉藤中頭郡書記、医師児玉、比嘉の諸氏立会の上、布哇移民応募者の体格検査を施行せしに、島尻郡七名、那覇区七名、首里区五名、中頭郡一名、国頭郡十名、都合三十名丈け体格検査に合格せしより、直に採用したる由なるが、志願者は那覇島尻より八十名、首里中頭より三十余名、総数百十余名の多きに達したる由なるが、当選者は明日出港の薩摩丸に搭じ発程渡航し、神戸移民協会代理店に於て本県より神戸までの船賃及び神戸より横浜までの汽車賃其の他一切の諸入費を仕払、横浜移民協会に於て洋服を着替へ、来る二十日横浜抜錨の香港丸に搭じ、十四日間にて布哇着の予定なりと云ふ。因に記す、本県属謝花氏は此程出張を命ぜられ、多分明日出港の薩摩丸より出発する筈に就き、序に神奈川県までは同行するとの事なれば、不知案内の旅行者に取ては少なからぬ便利を与へるとならんと云ふ。又国頭郡の応募者は該郡に於て体格検査を行ひ、採用の上出願するならんと云ふ。

国頭郡布哇移住民

明36・1・23 琉新

国頭郡より布哇へ出稼の為め移住せんとする者数十名あり。今回岡山県帝國殖民会社の事務代理人出張し、移住の手續きに就き打合中の由にて、同郡より移住希望の者、都合四十二名にて、来る二月に十二名、三月に三十三名渡航せん筈なりといふ。

**特別廣告**

**移民募集**

「メキシコ」行移民愈々  
 本月二十日神戸へ向ケ  
 那覇港出發致候ニ付渡  
 航希望ノ方ハ此際至急  
 御申込被下度候

体格検査ハ左ノ二ヶ所  
 ニ於テ執行仕候ニ付何  
 レトモ便宜ノ所へ御申  
 込可相成候

明治三十七年六月九日  
 那覇上ノ倉  
 東洋移民合資會社業務代理人  
 肥後孫左衛門  
 國頭郡名護間切大茶久一心館  
 本社出張員 狩谷 三市  
 (明37・6・9 琉新)

**特別廣告**

メキシコ国行移民乗船第八永田丸  
 六月二十一日(旧五月八日)那覇  
 港出帆、国頭郡名護工寄セ、神戸  
 へ向ケ出發可致候。

東洋移民合資會社業務代理人  
 肥後孫左衛門  
 (明37・6・15 琉新)

**特別廣告**

移民希望羽地(古賀村)中城(喜田村)  
 一五二便宜の所へ申込む

大陸移民合資會社國頭郡民合資會社  
 業務代理人當山久三  
 (明37・7・3 琉新)

昨年中の外国移民

明38・6・29 琉新

昨三十七年中県下各地方より海外出稼として渡海許可の人員及送金額は左の如し。

郡区名	渡航人員	送金額
那覇区	一〇	三九九円
首里区	三四	八四四
島尻郡	八三	一、七三二
中頭郡	一六五	三、二七〇
国頭郡	三八五	一七、六五八
宮古郡	二	一
合計	六七九	二三、九〇三

大宜味村 移民調査票 (ブラジル)

氏名	金城 徳一 (102歳)		男・女			
本籍地	大宜味村字田嘉里537 (屋号: 徳藏 )					
生年月日	1914. 8. 4	出生地	大宜味村字田嘉里			
父母	徳藏、ウシ	世代	1世・2世・3世・4世			
渡航年	1960年(昭和35)5月17日 チサダネ号					
居住地	1. 父母の居住地					
	3. あなたの居住地		ブラジル国、サンパウロ市			
家族	続柄	名前	生年月日	備考	経歴・役職	
	妻	金城 タケ	1915. 6. 7	死亡	移民の動機	英男、呼寄せ
	母	ウシ	1892. 9. 9	死亡	職 業	農業
	長男	金城 英男	1937. 1. 18			
	二男	金城 光男	1939. 9. 18	死亡		
	三男	金城 八州男	1942. 12. 6	帰化	郷 土 訪 問	(正月・旧盆・世界ウチナーンチュ大会等) 母、ヤス子、親戚訪問
	長女	金城 ヤス子	1947. 8. 3			
	四男	金城 英政	1950. 5. 11			



▲鳥袋の耕地にて 家族写真 (1961年8月8日)



▲鳥袋の耕地にて コーヒー収穫 (1961年8月8日)

大宜味村 移民調査票（ブラジル）

氏名	松本 久雄 (81歳)		Ⓜ・女			
本籍地	大宜味村字田港13 (屋号: )					
生年月日	1935. 8. 5	出生地	ブラジル国サンパウロ州マリリア			
父母	松一、ウサ	世代	①世・2世・3世・4世			
渡航年	松一 1954年6月19日 チサダネ号 (第一次ポルビア移民) ウサ 1955年 チチャレンカ号 (第三次ポルビア移民・夫の呼寄)					
居住地	1. 父母の居住地	日本				
	3. あなたの居住地	ブラジル国サンパウロ市				
家族	続柄	名前	生年月日	備考	経歴・役職	
	本人	松本 久雄	1935. 8. 5	ポルビアから転住	移民の動機	
	妻	松本 清子	1938. 8. 3		職業	
	長男	松本 アキラ	1966. 1. 2			
	二男	松本 マサル	1967. 7. 19			
					郷土訪問	(正月・旧盆・世界ウチナーンチュ大会等) 親戚訪問

氏名	松本 ロベルト アキラ (51歳)		Ⓜ・女			
本籍地	ブラジル国籍 (屋号: )					
生年月日	1966. 1. 2	出生地	サンパウロ州サンパウロ市			
父母	久雄、清子	世代	1世・②世・3世・4世			
渡航年						
居住地	1. 父母の居住地	ブラジル国サンパウロ市				
	3. あなたの居住地	ブラジル国サンパウロ市				
家族	続柄	名前	生年月日	備考	経歴・役職	
	本人	松本 ロベルト アキラ	1966. 1. 2		移民の動機	
	妻	松本 マユミ	1967. 1. 9	主婦	職業	自営業
	長女	松本 アドリアナ サユリ	1994. 2. 25	学生		
	次女	松本 デボラ ミユキ	1996. 1. 8	学生		
	長男	松本 ヴィクトル ヒデキ	2000. 8. 19	学生	郷土訪問	(正月・旧盆・世界ウチナーンチュ大会等) 1990年出稼中に親戚訪問





## 第六章 ―

# 母村との交流

## 母村との交流

大きな希望を胸に世界に羽ばたいて行つた県系人は、気候風土・文化の違う環境の中にあつても、勤勉さを忘れず、ときには差別に耐えながら、懸命に努力を続け少しずつその地に根を張り枝葉を広げていった。

現代のように通信・交通手段の発達していないその頃、言葉の通じない異郷の空の下で孤独な移住者を襲う閉塞感や不安がどれほどのものか、現代の私達には想像すら容易でない。

初期海外移民の記録をみると、鞭や銃を持った監督の監視の中での一日十時間以上の労働が普通で、中には夜間の逃亡を防ぐという名目で足枷をかけた奴隷扱いをする雇主まであったという。未開地の開拓においては、大陸特有の気候や災害、原因不明の熱病に悩まされながらも、懸命に大地と格闘し、一步一步足跡を刻んでいった先人の苦勞を思うとき、厳しい労働に明け暮れる生活の支えは、自分の身を立て、故郷の家族に少しでも楽な生活をさせてやりたいという一心であり、志を同じくする同胞との連帯感であつたと思う。

渡航先を終の棲家と定め、しっかりとその地に根を下ろしていても、移住者の心の中には常に「ふるさと沖繩」が息づいている。一世が元氣なうちは、シチガチソーガチに家族を引き連れ「故郷に錦を飾る」里帰りの光景がよく見られ、大勢の親戚と過ごすその時間が、二世三世のウチナンチュとしてのアイデンティティーを育んできた。しかし、世代が替わり現地に馴染んでいくにつれ、県人会や村人会などのあり方も変わりつつあり、これからの母県・母村との繋がりを模索する時期を迎えている。

### 世界のウチナンチュ大会

移民として世界に雄飛していった県系人の功績を称えるとともに、ウチナンチュネットワークの確立、発展を目指して一九九〇（平成二二）年に始まった「世界のウチナンチュ大会」も、二〇一六（平成二八）年で第六回を数えた。

一世紀を超える沖繩移民の歴史を経て、世代交代の進む中で、次世代への沖繩アイデンティティーの継承を意識したこの取り組みは、大会期間中様々なイベントが催され、「ふるさと沖繩」を心の支えに頑張ってきた移民やその子孫と、母県沖繩の人々が心を通わせ連帯感に胸を熱くする姿が見られる。大宜味村においても、第一回大会からこれまで、「村出身者歓迎交流会」を催し、遠く離れた郷里に帰ってきた海外のイギミンチュは、限られた時間を惜しむように、家族や友人との再会に笑顔が溢れ、交流を深めている。

左に、村出身者歓迎交流会の記録と参加者名簿を紹介する。残念ながら、第二回大会（平成七年）の資料が残っていないが、村広報誌より開催日程と参加者数を確認した。

#### 第一回世界のウチナンチュ大会村出身者歓迎交流会

日 時 平成二年八月二四日 午後三時～  
場 所 大宜味村農村環境改善センター  
参加者 二五名

#### 第二回世界のウチナンチュ大会村出身者歓迎交流会

日 時 平成七年十一月一七日 午後四時～  
場 所 大宜味村農村環境改善センター  
参加者 三三名

#### 第三回世界のウチナンチュ大会村出身者歓迎交流会

日 時 平成一三年十一月三日 午後五時～  
場 所 大宜味村農村環境改善センター  
参加者 三二名

#### 第四回世界のウチナンチュ大会村出身者歓迎交流会

日 時 平成一八年一〇月一四日 午後六時～  
場 所 大宜味村農村環境改善センター  
参加者 四三名

#### 第五回世界のウチナンチュ大会村出身者歓迎交流会

日 時 平成二三年一〇月一五日 午後五時～  
場 所 大宜味村農村環境改善センター  
参加者 二五名

#### 第六回世界のウチナンチュ大会村出身者歓迎交流会

日 時 平成二八年一〇月二八日 午後三時～  
場 所 大宜味村農村環境改善センター  
参加者 五七名

ペルー	三十一名	ブラジル	十五名	アメリカ	五名
ボリビア	一名	アルゼンチン	四名	カナダ	一名

第1回 世界のウチナーンチュ大会村出身者参加者名簿（※大会資料より）

氏名	性別	世	年齢	職業	出身字	国名
金城 光栄	男		74		田嘉里	ブラジル
松本 精一	男		69		田港	〃
宮城 春子	女	1世			塩屋	ペルー
金城 峯子	女	1世				〃
山城 カルメン	女	2世			喜如嘉	〃
山城 静	女	1世			喜如嘉	〃
上地 イサベル	女	2世			大保	〃
上地 トヨ	女	2世			大保	〃
上地 安繁	男	2世			大保	〃
神里 八重子	女	1世			田嘉里	〃
嵩原 良子	女	1世			喜如嘉	〃
野里 栄順	男	1世	64	農業	謝名城	ボリビア
野里 照子	女	1世	60	家事	謝名城	〃
ハリー エマ	女	2世	24	教師	津波	米国（北カリフォルニア）
ハリー エミコ	女	1世	60		津波	〃
宮城 嗣男 フレッド	男				根路銘	米国（ロスアンジェルス）
金城 ハル	女				喜如嘉	ブラジル
金城 常松	男				喜如嘉	〃
金城 ウト	女				喜如嘉	〃
知念 廣	男				塩屋	ペルー
知念 フランシスカ	女				塩屋	〃
山城 良子	女				謝名城	米国
TOM CANEVARI (夫)	男				謝名城	〃
山城 亀徳	男				田港	ペルー
山城 米子	女				田港	〃



